



「ふるさとづくり」の 推進に向けて

～「ここをよせる」「そこにかかわる」～



ふるさとづくり有識者会議

ご挨拶

最近の日本をとらえ次世代に思いをいたした時、国民の皆様一人一人が、協力し合う精神、未来に向けた活力を取り戻す必要があると思います。

私は、「ふるさと」を愛する気持ちを育むことは、地域の共同体の連帯を確かなものとするだけでなく、日本人としての誇りを取り戻し、世界からも信頼され、豊かな国としての我が国の更なる成長につながるものと考えます。

ところが、現実には、「ふるさと」の原風景は失われつつあり、私は、活力の源であり、誇りである「ふるさと」の価値を再認識し、後世に伝えていくにはどうしたらよいか考えてまいりました。

そこで、人それぞれが所属する場所、「ふるさと」とはどうあるべきかということについて、木村内閣総理大臣補佐官（ふるさとづくり推進担当）を中心に、「ふるさとづくり有識者会議」でご議論いただきました。

地方創生元年の今年、ローカル・アベノミクスを実現し、日本経済を活性化することが最大の課題となっていますが、それと併せて、内面に着目したふるさとづくりの推進に取り組むことの重要性も更に増していくこととなると考えております。

この度、「ふるさとづくり有識者会議」の委員の皆さんのご提言や活動の成果などを『「ふるさとづくり」の推進に向けて』としてまとめていただきましたので、皆様是非ご活用ください。



内閣総理大臣
安倍 晋三



私は、平成24年12月の安倍内閣発足以降、安倍総理のふるさとに対する熱い思いを受けて、「ふるさとづくり推進担当」として各種の取組を進めてきました。

平成25年4月に設置されました「ふるさとづくり有識者会議」の委員の皆様方とともに、検討会議や現地調査・実践活動に精力的に取り組み、同年7月3日には安倍総理に中間報告を提出し、ふるさとづくりの大きな方向性を示すとともに、わかりやすいガイドブックを作成し、全国のふるさとづくり推進組織や各自治体等に配布しました。

その後、関係省庁の施策のあり方や今後の展開方向等の議論を踏まえて、『「ふるさとづくり」有識者会議報告』を安倍総理に提出しました(平成26年4月10日)。

その後も、この有識者会議報告等を基に、「ふるさとづくり推進実践活動」を全国各地で行うなど、「ふるさと学」などの重点3事業を中心とした具体的取組を更に積極的に進めるための活動を行い、ふるさとづくりの全国発信に積極的に取り組んできました(有識者会議は計10回、実践活動等は計21回、18地域で開催)。

更に、ふるさとづくりに携わる方々の励みになり、様々な活動がより一層活性化するよう「内閣総理大臣表彰」を創設し、平成26年11月に第一回内閣総理大臣表彰式を開催したところです。

また、豊かで明るく元気な地方の創生は、安倍内閣の最重要課題であり、平成26年12月に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が策定されましたが、これまでのふるさとづくりの推進活動の結果として、この総合戦略の政策パッケージの一つの柱として、ふるさと学を取組をはじめとした「ふるさとづくりの推進」が位置付けられたところです。

この冊子は、「ふるさとづくり有識者会議」の委員の皆さんのご提言やこれまでの「ふるさとづくり有識者会議」の活動の成果などをまとめたものです。この冊子が、今後、ふるさとづくりの取組が各地で推進されていく際の一助になれば幸いです。



内閣総理大臣補佐官

木村 太郎



| | | |
|-------|-------------------------------------|-----|
| 第1章 | 「ふるさとづくり」の推進の意義 | 1 |
| 第2章 | これからの「ふるさとづくり」の推進についての提言 | 9 |
| 第3章 | ふるさとづくり推進実践活動等の記録 (ふるさとづくりの全国発信) | 37 |
| 第4章 | 表彰・イベントの実施等 | 71 |
| 参考資料編 | | 101 |

第1章

「ふるさとづくり」の推進の意義

1. 「ふるさと」とは何でしょうか

従来から美しい自然と文化の中で、私たちは、その営みを続けており、日々の暮らしの中で、自分が生まれ育った場所を「ふるさと」と認識し、愛してきました。「ふるさと」に帰属しているという意識が、私たちに安心感をもたらしてきたのです。「ふるさと」は、いわば心のよりどころでした。

そして、その「ふるさと」の原風景には、青き山、清き川、風や空、祭りなど、世代を超えての一定の原型があるように思われますが、しかし、実際には途絶えてはならない原風景が失われつつあるなど、現実と「ふるさと」の原型に隔たりが生じてきています。

また、大都市に人口が集中している現状においては、自分が生まれ育った場所が「ふるさと」であるという認識をもたない人も増えています。

このような状況を踏まえると、私たちの活力の源であり、誇りである「ふるさと」の価値を再認識し、「ふるさと」を愛することの大切さを後世に伝えていくことが必要ではないでしょうか。

「ふるさと」は、生まれ育った場所だけではありません。

「ふるさと」は、私たち日本人一人ひとりが、自分のよりどころとなる「こころをよせる」やすらぎの場を指します。

例えば、両親や祖父母の出身地、学生時代を過ごした場所、勤務で赴任した場所、旅行で訪れた場所等、何かのきっかけで愛着を感じ、何らかの形でかかわった様々な場所が「ふるさと」になり得ます。また、生まれ育ったことはもちろん様々なかかわりがあれば、地方に限らず、東京や大阪などの都市部も、その人にとっての「ふるさと」です。



2. 今、なぜ、「ふるさとづくり」を進めていく必要があるのでしょうか

このように、現実と「ふるさと」の原型に隔たりが生じ、自分が生まれ育った場所が「ふるさと」であるという認識をもたない人も増えている状況を踏まえると、私たちの活力の源であり、誇りである「ふるさと」の価値を再認識し、「ふるさと」を愛することの大切さを後世に伝えていくことが必要ではないでしょうか。そして、そのために「ふるさとづくり」をどのように進めていくかを、今、考えてみるべきではないでしょうか。

大切なのは、「こころをよせる」ばかりではなく、何かのかたちで、「そこにかかわる」ことです。小さなことでもかまいません。そこに旅に出かけてみる。その土地の産品を買ってみる。そこに住む人といっしょに汗を流して働いてみる。

それらの少しの「かかわり」で、「こころをよせる」気持ちが強くなり、それがきっかけとなって、

さらに深く「かかわる」ようになる。

このくり返しが新しい「ふるさと」をつくります。

愛着のある場所との「かかわり」によって、失われつつある「ふるさと」への誇りと価値を再び作りだします。

新しい「ふるさと」は、100年先の子どもたちまで受け継がれるものになっていきます。

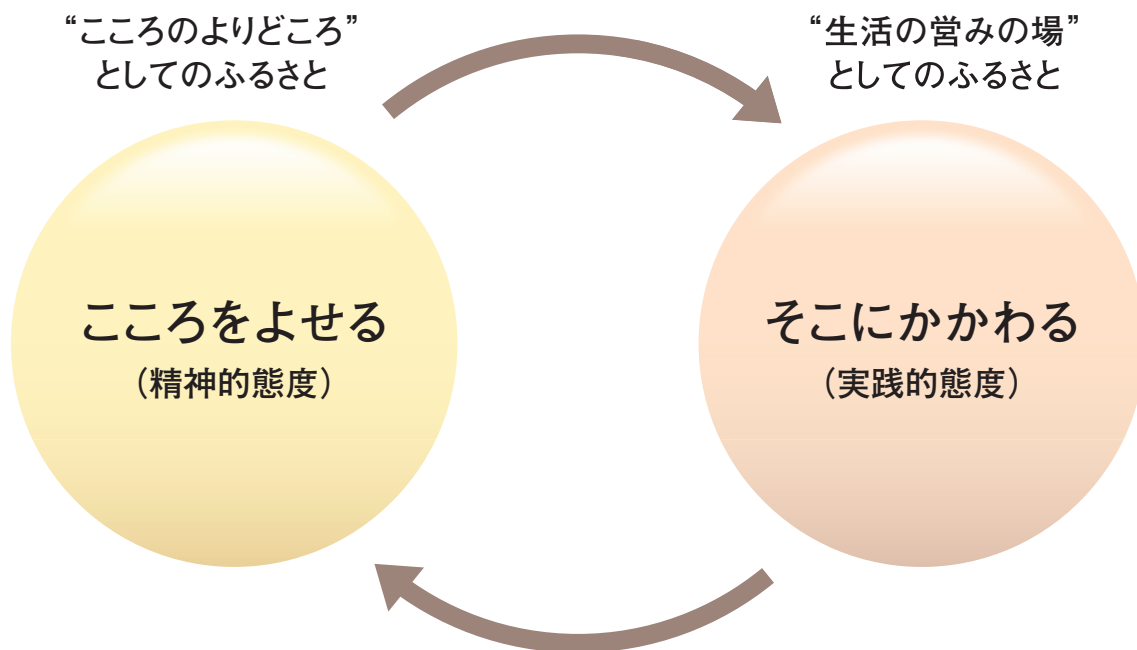
「ふるさとづくり」とは、ある場所に「こころをよせる」と、「そこにかかわる」ことのくり返しであり、ひとりひとりのこれまでの「ふるさと」に対する愛着、帰属意識が一層高まるとともに、新しい場所を「ふるさと」と思うことにもつながり、これによって「ふるさと」がつくられていきます。



ふるさとづくりとは、
ある場所に「こころをよせる」ことと、
「そこにかかわる」ことのくり返しです

このくり返しが、新しい「ふるさと」をつくります。
愛着のある場所との「かかわり」によって、
失われつつある「ふるさと」への誇りと価値をふたたびつくりだす。
新しい「ふるさと」は、100年先のこどもたちまで
受け継がれるものになっていきます。





3. 「ふるさとづくり」推進のためには、 何をすることが必要でしょうか

こころをよせる場である「ふるさと」とのかかわり方は様々であり、いくつかのインターフェイスが存在し、人によって、様々な要素や深さ、単位で「かかわり」をもつことにより、「関わりのネットワーク」が構築されます。

ふるさとづくり有識者会議では、この「ふるさと」とのかかわりを、「環境のかかわり」、「人と人との関係のかかわり」、「経済のかかわり」、「教育的かかわり」、「文化的かかわり」の5つの視点で整理しました。

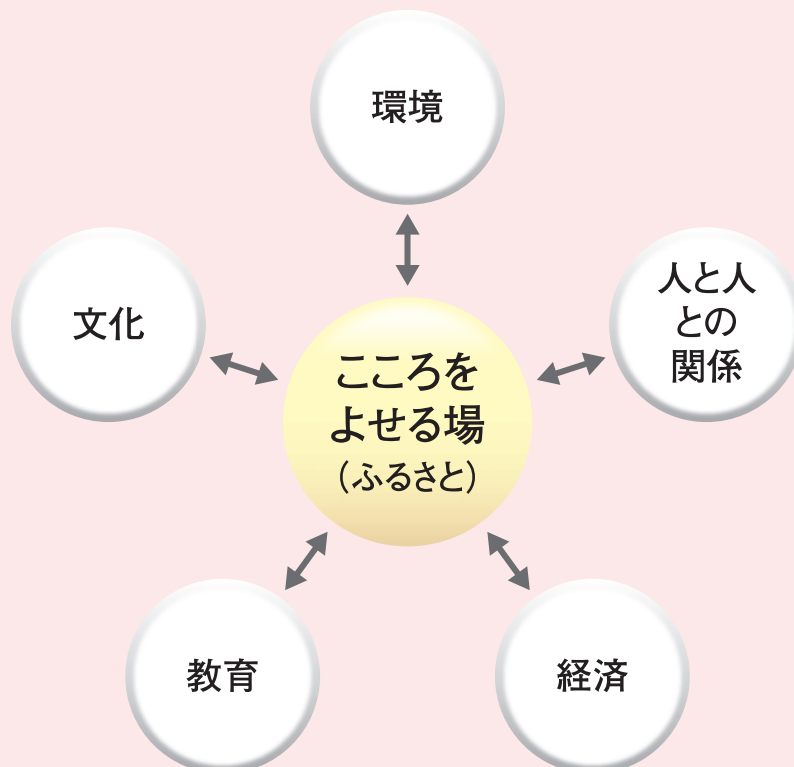
「ふるさと」に対する一つの行動が様々な「かかわり」の側面を持つ場合もあり、これらの「ふるさと」に対する「かかわり」によって、こころを寄せる場である「ふるさと」に対する帰属意識が形成され、誇りが回復し、癒やし、安心の場である「ふるさと」がつくられていきます。

今後の「ふるさとづくり」推進をより一層実のあるものにしていくために、ふるさとづくり有識者会議としては、以下の点について取り組んでいくことが重要であると考えます。その際には、全国それぞれの地域の個性を活かした取り組みが活性化していくよう、「多様性」を担保することが必要です。

①「ふるさと学」の推進により、「ふるさと」に対する誇りを回復すること

それぞれの「ふるさと」には、固有の自然や歴史や文化があり、例えば、藩校教育に見られるように、その場所ならではの学びの体系があり、街道毎での文化圏の形成も見られました。

いまいちど「ふるさと」の現状や地域の魅力、歴史などを体系的に整理し、深く掘り下げ、再発見し、それを幼児教育、小・中・高等学校や公民



館・図書館・美術館あるいはインターネットなど様々な機会学ぶことにより、「ふるさと」に対する理解を深め、新たな魅力や普遍的な価値に気づき、誇りを取り戻し、「こころをよせる」きっかけにすることが必要です。例えば、農林水産業をはじめそれぞれの地域の産業を題材として地域経済を学ぶことも考えられます。

こうした取組を「ふるさと学」と呼び、各地域にふさわしい「ふるさと学」を展開していくことが必要です。

②ふるさとづくりコーディネーターの育成により、「ふるさとづくり」の担い手を育てること

「ふるさと」に対して、様々なかたちでの「かかわり」を推進していく核となる人材、「ふるさと」に対する深い愛情と誇りを持ち、「ふるさと」の価値を守り・創り・次の世代へつなげていくための熱意と知識と行動力で、「ふるさとづくり」を具体的な成果へとつなげる人材、すなわちふる

さとづくりのコーディネーターを育成することが必要です。

③全国のふるさとづくり推進組織との協働により、地域の主体的な取組を後押しすること

すでに各自治体(47都道府県、1742市区町村)には、ふるさとづくりに「かかわる」数多くの団体が存在します。

各自治体やその諸団体に対して、先行事例や有識者の成功事例を情報共有し、さらにそれぞれの団体が推進したい方向性に対して、ふさわしい政策や制度的なメニューを提示することで、こうしたふるさとづくりの推進をサポートすることが必要です。

このような観点から、ふるさとづくりの啓発資料を作成し配布しましたが、引き続き、有識者や各省庁を交えて、都道府県や市町村と連携・協力しながら、全国各地の推進組織によるふるさとづくりを強力にサポートしていくべきです。



4. 「ふるさとづくり」と地方創生との関係

このように、平成25年度以来、ふるさとづくりの推進活動に取り組んできた結果として、安倍内閣の最重要課題である豊かで明るく元気な地方の創生の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成26年12月27日閣議決定）において、政策パッケージの一つの柱として、「ふるさとづくりの推進」が位置付けられました。

「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、「ふるさとづくりの推進」として、人口減少や超高齢化が進行する中で、全国で多くの「ふるさと」

が、その存在そのものの危機に瀕しており、そのうえで、生まれた人は「ふるさと」にとどまり、都会に出た人は「ふるさと」に帰るきっかけとし、また、都会に生まれた人については、そこが新しい「ふるさと」となるよう、その場所に対する愛着、帰属意識を高める「ふるさとづくり」の取組を進めていくことは、地域に住む住民が主体となった地方創生の推進に大きく寄与するものであるとされました。



第2章

これからの「ふるさとづくり」の
推進についての提言

「ふるさとづくり有識者会議」は、平成25年4月の設置以降、現地調査、実践活動等を実施し、「ふるさとづくり」の大きな方向性について議論を行い、平成26年4月に「ふるさとづくり有識者会議報告」をとりまとめ、安倍総理に提出しました。

この報告書を受け、「ふるさとづくり有識者会議」は、更に実践活動を展開し、特に先進的な活動を行う個人、団体等に対する内閣総理大臣表彰を創設するなど、全国の「ふるさとづくり」活動の一層の活性化に取り組んできたところです。

「ふるさとづくり」の推進に取り組んできた「ふるさとづくり有識者会議」の各委員の皆様から、今般、「ふるさとづくり」の推進についてのご提言をいただきましたので、次の通り、それぞれのご提言を3つのテーマ別にとりまとめました。

テーマ1.「ふるさとづくり」の推進についてどう考えるか

「ふるさと」とは何でしょうか。今なぜ「ふるさとづくり」を進めていく必要があるのでしょうか。「ふるさとづくり」推進のためには、何をすることが必要でしょうか。小田切徳美座長、木下斉委員、後藤孝典委員、原範子委員及びマリ・クリスティーヌ委員からは、そうした「ふるさとづくり」の推進についての考え方について、提言をいただきました。

- ふるさとづくりの実践（小田切徳美座長）
- 江戸時代の農村を再生した二宮金次郎に学ぶ、「ふるさとづくり」（木下斉委員）
- 思春期国内相互留学制度を提案する！（後藤孝典委員）
- 「ふるさとづくり」～4つの視点～（原範子委員）
- 「ふるさとづくり」は「QOLを高める」新しい暮らし方（マリ・クリスティーヌ委員）

テーマ2. 全国を取組事例に学ぶ

全国各地で、様々な「ふるさとづくり」に関する取組が行われています。大南信也委員、岸川政之委員、殿村美樹委員、原田弘子委員及び藤崎慎一委員からは、全国の「ふるさとづくり」に関する取組事例から何を学び、他の地域にどう活かすことができるかについて、提言をいただきました。

- 日本のふるさとをステキに変える！（大南信也委員）
- 地方の挑戦～未来の大人たちとともに～（岸川政之委員）
- 「ふるさとづくり」に必要な教育とは。（殿村美樹委員）
- ふるさとをつくる若者たち（原田弘子委員）
- 「ロケツーリズム」と「ご当地グルメ」による“ふるさとのこし”～人々の心の“ふるさと”を未来につないでいくために～（藤崎慎一委員）

テーマ3. 「ふるさとづくり」と地方創生

個性あふれる地方の創生は、政府の最重要課題となっており、地域活性化の諸施策と併せて、日本人の心のよりどころである「ふるさと」を愛する気持ちを育み、誇りあるふるさとを取り戻す「ふるさとづくり」の推進の重要性は、更に増しています。中貝宗治委員及び濱田純委員からは、「ふるさとづくり」と地方創生の関係について、提言をいただきました。

- ふるさとづくりと地方創生と何の関係があるのか？（中貝宗治委員）
- 「ふるさと学」と地方創生（濱田純委員）

ふるさとづくりの実践

明治大学教授 小田切 徳美

著名な民俗研究家である宮本常一は、今から約40年前の講演会で次のように発言をしている。

皆さん自身がふるさとにしながら、じつはふるさとを捨てはじめています。そのことを反省していただきたい。これから先、いくらでも地域社会を伸ばしていく道はあるんです。それはみんなが心を寄せ合って、お互いにどのようにかかわりあいを持つかを考えていくことです。それがふるさとの心です。(「ふるさとの心」宮本常一講演選集・第3巻『都会文化と農村文化』(農文協、2014年)所収、1976年講演)

ここでは、「ふるさとの心」は人々が「心を寄せること」と「かかわりあいを持つこと」であるとされている。実は私達の「ふるさとづくり有識者会議」で議論した「ふるさとづくり」の定義はこれとほぼ重なる。そこでは「ふるさとづくりとは、ある場所

に『こころをよせる』ことと、『そこにかかわる』ことの繰り返しです」とした(『ふるさとづくりガイドブック』)。

しかし、宮本氏の議論と大きく異なるのは、氏は「ふるさと」とはその地域に生まれ育った者こそが意識するものであると主張されている点である。先の引用文で「ふるさとを捨てはじめています」と批判しているのは、そこに住んでいながら、祭りなどにかかわりを持たない者に向けられている。その点で、ふるさとはその地域出身者により作られるものだというこだわりが宮本氏にはある。

しかし、それから時代は変わった。地方圏からの激しい人口移動により、過疎化、過密化が言われて既に久しい。そのため、2011年の統計によれば(社会保障・人口問題研究所「人口移動調査」)、東京圏在住者の68%が同じ東京圏出身となっている。「東京二代目」「三代目」は、いまや当たり前になっている。盆や正月の帰省ラッシュが一時ほど激烈



地域おこし協力隊の活動の様子(広島県三次市)

でなくなったのはそうした背景があると言われている。

東京圏出身者にとって、生まれ育った都市はもちろん「ふるさと」である。しかし、同じ民俗研究家の結城登美雄氏は、この点にかかわり、日本人には「意識の遠隔対象性」があり、身近なものよりも遠くにあるものに価値を感じる傾向があることを指摘する。かつての地方部から都市への人口流出がまさにそうであつたのかもしれない。そうなる、逆に、東京圏生まれの東京人は地方部、特に農山漁村に関心を待つ可能性があることになる。

そうした傾向は、実は現に発生している。都市部の住民が、特に若者を中心に農山漁村に移住する「田園回帰」であり、各方面で注目されている。つまり、現代では、ふるさとは、地方出身者の専売特許ではない。いまや国民の多数派となった都市出身者にも、その出身の都市以外のふるさとが存在すると考えるべきであろう。そして、そうした状況を作り出すこと自体が「ふるさとづくり」であろう。

このように考えると、ふるさとをめぐり、必要なことが次のように整理できる。

第1に、その地域では、その地域出身者のみならず、地域外出身者を含めて、「ふるさと」として選択されるように、地域をみがき、地域の魅力を高めることである。いわゆる「地域づくり」という営みがこれを指している。それは、決して、仕事や所得という経済的要素だけではない。地域の人々の絆、四季の移ろいの中の景観、特徴的な伝統文化などを含めて、地域みがきの要素となる。各地のふるさとづくり推進組織はまさにそれを実践しつつある。そのことにより、人々がその地域に心を寄せる条件が形成される。さらに、地域みがきの素材を学ぶ「ふるさと教育」はこうした活動の基礎的要素となり、その充実は決定的に重要である。

また、「かかわる」こともふるさとづくりの要素である。そのために、第2に、その地域から見て、例えば都市住民など遠隔地にいる人々がかかわる仕組みを積極的に作ることが要請されている。「ふるさと小包」などはその代表であるが、最近では「ふるさと納税」という手法も整備されている。それらの前提として、ふるさとの情報をしっかりと発信することも欠かせない。

そして第3に、そのかかわりが深まる仕組みを作ることも必要であろう。最終的には、Uターン、Iターンにより、その地域の移住に導く仕組みである。そのためには、「ふるさと小包」や「ふるさと納税」の段階から、さらに、「地域を訪れる」、「地域でボランティアをする」というように、空間的距離を短くする働きかけが必要であろう。いわば、「かかわりの階段」である。「田園回帰」はこの階段を上り切った状態を指している。

こうした一連の過程こそが「ふるさとづくり」であろう。このように、「ふるさとづくり」として、取り組むべきことは、既に明らかである。さらに、「ふるさと納税」や地方移住促進策のように制度的整備も進みつつある。次は、先発事例を学びつつ、実践することであろう。そのことにより、さらなる制度的課題も明らかになる。

その際、次のことも強調したい。それは、現在は東京五輪(1964年)が開催され、また「過疎」という造語が生まれて、約50年が経たことである。つまり、わが国のいままでの地域を象徴した、「過疎・過密」が生まれてから半世紀が経過した節目となる時期である。ここでは、「過疎・過密」に代わり、新しい半世紀の中で、どのような国土を創造するのか、特に「ふるさと」をどのように位置づけるかが、問われている。新しい「ふるさとづくり」もここから始まるのである。

江戸時代の農村を再生した二宮金次郎に学ぶ、 「ふるさとづくり」

一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス代表理事

木下 斉

縮小社会においてふるさとを守り、受け継いでいく上で、大変参考になる先人がいます。

江戸時代の衰退する農村再生で活躍した、「二宮金次郎」です。本を読みながら薪を背負っている姿を小学校などで皆さんも見たことがあるのではないのでしょうか。

あれは苦労に耐えるという姿だけでなく、幼き頃から彼は入会地に入り木を切り、当時燃料として売買されていた「薪(たきぎ)」を背負ってまちへ売りに行って稼いでいる姿なのです。幼くして両親を亡くすという不幸な境遇でも二宮家の復興のために努力する事業家としての姿でもあります。その後、見事二宮家を復興し、地元小田原藩でも一目置かれるようになり、後に全国各地の地域再生に携わることとなります。

ふるさとを守るのに必要なのは、 支援ではなく、自立力。

二宮金次郎による農村再生の取り組みは、弟子たちの手によって「報徳記」というものにまとめられています。

彼は自身の経験からも衰退した地域からの再生案件の依頼に対しても、最初から厳しく対応します。例えば、地域の衰退は単に条件が恵まれていないという農民たちに対して、荒廃した田畑を放置したまま「うちは貧しい」と嘆くことに厳しく叱責します。なぜ米が育たぬのであれば、畑にしないのか。米なら一毛作だが、畑であれば二毛作ができるではないか。衰退しているのはまさに自分たちの日々の墮落した生活の結果ではないのか、と厳しく叱責します。

さらに藩などから財政的支援についてもお殿様に進言して中止させます。

支援の資金を送れば送るほど、いかにその支援をもらうかということに役人も農民も考え動くようになる。そのような資金こそがその地域を貧しくしているのだ、と厳しく戒めます。その後、一切の支援を止め、地域の生産量を回復することで地域を復興することに専念させます。

自立するということは、全国にある地域それぞれが、自らの魅力によって、自らの価値観によって、独自に成立していくことが可能となることです。そしてそのような個性をもって自立した「ふるさと」が全国に集積している姿こそ、日本が目指すべき歴史と文化、そして多様性のある社会であると私は思っています。

収支をあわず、「分度(ふんど)」の徹底。

さて、二宮金次郎の地域再生手法は「報徳仕法」として体系化されています。

報徳仕法では、まず重要なのは、分度であるとされています。分度とは、収入が100であれば、支出を80に抑え、20を蓄え、次に投資するといったように、つまりは収入の則した生活を心がけ、手元にしっかり蓄えも残せということです。

かつて、地方は自ら稼ぎ、蓄えを残し、地元を守り続けてきました。特に生活基盤となる一次産業が集積する地方は日々の生産活動を通じて、生産量を拡大し、地域を豊かにしてきました。

高度経済成長期を経て、都市部の稼ぎをもとに地方への再分配が生まれ、その再分配を中心に地方が動くようになってから、ふるさとの持つ産業

的基盤は失われてきたとも言えます。今一度、一次産業の生産力を技術的にもあげていく必要があります。そして分度を徹底し、生まれた財に即して生活を豊かにし、さらに将来に向けて投資をし続けるという循環こそが大切です。

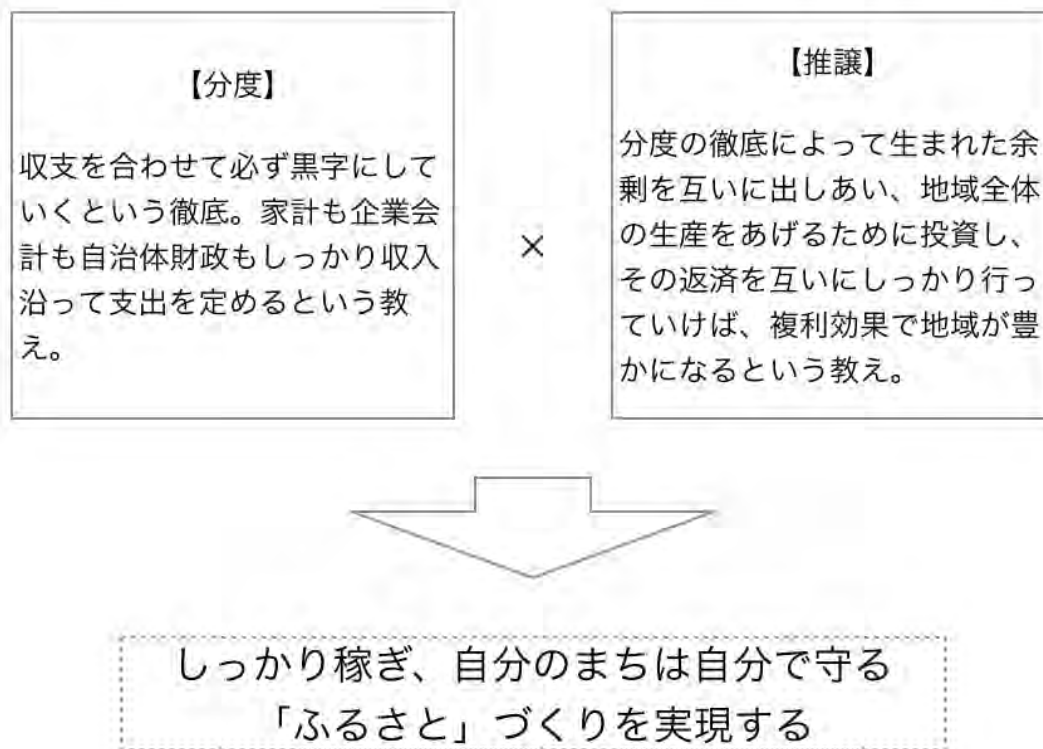
地域における資金循環を生み出す、「推譲(すいじょう)」の徹底。

二宮金次郎は、さらに推譲という方法についても説いています。

これは自分たちで稼いだ余剰をそのまま自分の生活に使ってしまうのではなく、他人が新たに開拓するなどの投資を行う際に手元の余剰を貸し出

すように言っています。今でいう地域金融の仕組みです。

せっかく分度を徹底して手元に残した資金も一度使ってしまうと、それで終わりになります。しかしながら、地域内の別の人が取り組む生産活動に資金を貸し出せば、その資金はさらに生産量を拡大することに寄与します。彼はこのサイクルはすべて「複利」で進み、分度を徹底し余剰を生み出し、さらに生産量を増やすことにその余剰を投資し続ければ、10年すると大きな成長になることを示しています。



今一度先人に学び、「ふるさと」を守り、育てよう

縮小社会は何も今だけでなく、江戸時代後期にも各地で発生しており、何より当時の農村を再生した二宮金次郎の地域経済開発の方法は、「ふるさと」を守ろうとする人々にとって様々な学びがあ

るものばかりです。ぜひ報徳記をはじめ、二宮金次郎の農村再生手法について今一度学び直すことが、「ふるさと」を守り、育てることになると思っています。

思春期国内相互留学制度を提案する！

弁護士法人虎ノ門国際法律事務所・一般社団法人日本企業再建研究会
代表弁護士

後藤 孝典

足で歩くと見えてくるものがいくつもある。特に私の好きな旧東海道、旧中山道、日光街道、旧甲州街道、旧奥州街道といった旧街道を歩くと、日本列島全域に、小さな島嶼にいたるまで、文化の恩寵が及んでいることがよく分かる。それを可能にしたものは、街道を歩いて江戸と自藩を行き来した参勤交代と宿場の発達であった。参勤交代によって江戸の文化が地方へ一方的に流れたのではなく、地方の文化が江戸へと逆流することを可能とし、他の地域に伝わることを可能にしたことだ。街道を往来したのは武士だけではなく、ふるさとづくりにおいては、この人の往来のもたらす文化伝播という歴史的事実について注目して欲しい。

「ふるさとづくり」が一つのテーマとして考察される理由は、ふるさとの衰弱と東京一極集中の病弊を何とかせねばという問題認識である。この点では、まず異論はない。問題は、この弊害に対して、



北国街道東脇往還松代宿

どのような解決策を対峙させるかである。「日本創生会議」は「地方元気戦略」として、地方から大都市への人の流れを変えること、特に「東京一極集中」に歯止めをかけることに基本目標を置くべきであると、その実現のため、若者に魅力ある地域拠点都市を造るべきであり、そこに投資と施策を集中すべきであると提言している。確かにこの提言は注目すべき点があるが、私としては、これに加えて



会津西街道大内宿

特に思春期の若者を中心とした人の動き・人の流れを加えたい。かつての参勤交代のように。

本格的な勉学を大学で始めるまえに、あるいは就職・仕事を始める前に、中学生から高校生の6年間のあいだで、本人の都合の良い期間に、1年もしくは2年、都会の子は地方へ、地方の子は都会へ、自ら学びたい地域を選択する、『思春期国内相互留学制度』を提案する。

これを実現するためには、地方に於ける受け入れ体制の整備が特に必要である。施設等については、廃校となっている校舎とか地方の大学施設といった既存設備の活性化もよいだろう。地方大学が生き延びる道として、就労のための外国人留学生を教育するよりは、日本の若者に、地域の伝統、歴史、風俗、農林漁業など生産の喜びと誇りを学ばせる拠点となってほしい。このためには、私が先に提案した「ふるさと開拓使」のような人材を育てることやシステム作りが最適であると考えます。

この留学制度には、かなりの経済効果も伴うはずだ。子供たちが大規模、定期的に交代移動すれば、教師たちも交代異動し、親たちも動きだし社会が動き出す。交通と流通が動き、田舎と都市が活性化し、新たなビジネスが始まる。一層の物的インフラ整備も必要となるだろう。

思春期の子供たちの教育のために、地方自ら自分たちの姿をしっかりと見つめ直してほしい。伝統産業、伝統文化だけではなく、祭りもそうだ。たとえば、オリンピックの聖火リレーをわが町の祭りで迎え、隣町の祭りの中へ送り込む、というような目標を持って地域の人々の心をつなげていく。その継承と連携が若者の心にしっかりと伝わった時、若者たちにとってはこの留学先が「もう一つのふるさと」となるのである。若いうちに「もう一つのふるさと」に接し、経験したことのない異なる価値観の存在を認識することは、若者が己を見つめ直すいい機会である。「もう一つのふるさとの」の方が自分には合っていると自覚する若者も出てくれば、就職先や退職後の安息の地として選択する可能性も高くなっていく。

田舎の若者にとっても都会の若者にとっても、この年頃の若者にとって、親元を離れることは、大人への通過儀礼として重要な意味をなす。親にとっても、この年頃の子を一時手放すことは大人への入り口を用意すべき義務というものだ。この義務が、国民の国家に対する義務と受け止められて思春期の子供たちが国内留学を始めれば、地方の衰退に自ずと歯止めがかかるだろうし、東京一極集中はなくなっていくはずである。



奥州街道奥道中三厩宿竜飛岬

「ふるさとづくり」～4つの視点～

全国生活研究グループ連絡協議会会長 原 範子

●私の考える「ふるさと」について

私が思う「ふるさと」は、緑豊かな山や田んぼや畑があって、スズメやツバメが自由に青空を飛び回り、地上ではカエルが大合唱し、モンシロチョウが舞い、メダカやザリガニが小川で遊び、人々はあいさつを交わし日常の何気ない話をしている、市場原理に翻弄されることもなく、人と自然が共生し、安心して暮らせる、どこへも持ち運びができない、かけがえのない場所だと思います。

これを次の世代に繋いでいくことが私達、今を生きる者の役目と思っています。

しかしながら、ヒトやモノ、カネが世界規模で流動するグローバル社会の中で、価値観が多様化し、少子高齢化、過疎化等に伴い地域への求心力が失われ、地域のまとまり、人と人との関わり・結びつきが薄れてきているように思います。

このような「ふるさと」を再生するためには、その風土を活かし（定住）、ともに結び合う（交流）を、そこで生活をしている地域住民や企業、病院、学校、自治体などが一緒になって、話し合いをしながら推進していくことが重要であります。

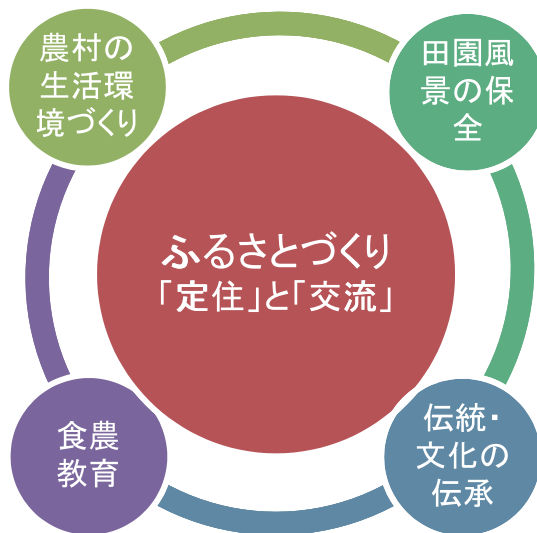
では、「ふるさとづくり」について、私の考えや取組を4つの視点から提言させていただきます。

●農村の生活環境づくり

まず、「定住」のためには、質の高い生活環境の下で、安全に安心して暮らせる住み良い地域づくり（農村の生活環境づくり）が必要です。

質が高いというのは、都市部ほどではなくとも、医療や福祉が充実し働く場所があること、子どもを産み育てやすい環境・場所であることです。

また、地域とのつながり、コミュニケーションが安全・安心につながります。村社会にはコミュニケーションがあり近所の人とあいさつを交わし、身近なことについて会話することで、地域との関わり、連帯感が深まっています。先の東日本大震災で、私の住む地域では上水道が2ヶ月近く断水しましたが、近所の井戸水を皆で分け合うことにより、地域生活を継続することができました。このように、みんなで助け合って生活を立て直そうとする地域の



心にある「ふるさと」の風景

絆、底力が発揮され、危機的な状況の中に地域の連帯感、郷土愛が感じられました。近年は竜巻や爆弾低気圧が発生するなど、これまでにない気象状況の下、様々な災害の発生が懸念されますので、ますます地域の絆、底力が重要になってきます。

●多面的機能を持つ美しい田園風景の保全

私の住む茨城県にある、つくばみらい市のNPO法人では、都市の子どもたちに農村の自然環境のすばらしさや農村文化の伝承を目的として、田んぼアートをはじめ、里山や川辺での自然観察会や農村体験を行っています。実際に来て、見て、触れて、感じてもらうことで、田んぼの持つ多面的な機能を知り、理解してもらうことができます。このような地道な活動、都市と農村の交流を継続的に行っていくことが、長期的な田園風景の保全につながっていくのだと思います。

●伝統・文化の伝承

農村では様々な伝統・文化（郷土食、歴史、習わし、しきたり、お祭り）・知恵・技術が人から人へ・時代から時代へ伝承され、「ふるさと」を形づくってきましたが、その綿々と続いてきた伝承が途絶えてしまうのではないかと感じています。

例えば、私の住む茨城県の北部に位置する大子町では、4年に1度行われる「大子ぶんぬき祭」があります。「ぶんぬき」とは踏み抜く、打ち抜くという意味の茨城弁で、お囃子競演で相手の囃子の調子を乱すように、太鼓の皮を打ち抜くほど荒々しく打ち合うところからその名が付き、お祭りでは、七つの屋台が勇壮なお囃子勝負を行います。しかしながら、大子町は昭和30年代には人口約43,000人でしたが、平成22年には約20,000人と半分に激減しており、今後も人口減少が続くと思われ、こういったお祭りを後世に引き継いで行くことが次第に難しくなっていくのではないかと危ぶまれます。

また、お祭りばかりではなく、「ぶんぬく」等の方言、ごさい漬（秋刀魚と大根を大量に漬けたもので冬の間の保存食とされています。）等の郷土食、その風土で生活していく上での知恵や技術なども「ふるさと」を構成している大切な要素です。これらを残す、伝えていくためには人材の育成に加え、聞き書きや映像として残していくことが必要と考えます。

また、学校の授業で地元学を取り上げたり、市町村の花や木を取り入れた華道の授業を実施したり、お茶の栽培が盛んな地域では茶道を学んだり、

家庭科の授業で郷土食を作るというのも良いと思います。

●食農教育

食農教育（野菜を食べよう350運動）の推進です。

私はピーマン農家なので、小学校や企業に出向いて、あらゆるところで「ピーマン物語」と題した紙芝居をしています。紙芝居を通して、子どもたちや親たちに「食」や「食を作る農業」の大切さを伝えていきます。併せて誰にでも簡単に作れるピーマンの肉詰めやピーマンの目玉焼きなどのピーマン料理を紹介しています。

子どもの頃から「食」の大切さ、体を作っているのは「食」であること、その「食」を作っているのは農家であり、農村であること、農村の環境が良いことが、体に良い「食」を作り、巡り巡って健康な体を作るのだということを百聞は一見にしかずで、「生活体験・農業体験」を通じて学んでもらうことが重要です。

以上、農山漁村において豊かで活力ある地域社会の実現と農林漁業の振興を目的とした会の会長として、そして農業の実践者としての立場から大きく分けて4つの提言をさせていただきました。当然これだけで「ふるさとづくり」が成るものではありませんが、その一助となればと、そして私自身も引き続き「ふるさとづくり」に力を尽くしていきたいと思っております。



紙芝居「ピーマンものがたり」



紙芝居「ピーマンものがたり」の実演



ピーマン料理の講習会

「ふるさとづくり」は「QOLを高める」 新しい暮らし方

異文化コミュニケーター、東京農業大学客員教授 **マリ・クリスティーン**

1. 「ふるさと」から想起される共通のイメージ

「ふるさと」と聞くと、自分の原風景を思い起こす人が多いことでしょう。それらは自然や生まれ育った町の風景だったり、人とのつながりだった



大町の田園風景

り、祭りなどの文化行事だったり、人によって実に多種多様です。ただ、共通しているのは「ふるさと」という言葉に懐かしさや温もりといった感覚が伴うことです。

私は、4歳まで日本で暮らし、その後ドイツやアメリカ、イラン、タイなどの諸外国で暮らしてきました。「ふるさと」として思い浮かぶのは、それらの国で過ごしたときのイメージで、どれも懐かしく、温かいものばかりです。そのイメージの中で、自分は楽しく、安心してホッとして、充実しています。つまり、ふるすとは、単なる場所ではない、自分が落ち着ける自分の居場所を示していると思うのです。

2. リタイア後の暮らしをどう設計？

さる2015年6月4日、民間研究機関「日本創生会議」の「首都圏問題検討分科会」が発表した報告書「首都圏高齢化危機回避戦略」は、話題を呼ぶものでした。2025年までに首都圏の75歳以上の高齢者人口が急増し、深刻な医療・介護サービス不足が起きると予測されました。そうした事態に対処するため、高齢者の地方移住が提言されたのです。

日本社会にとっては衝撃を呼び起こす提言でしたが、高齢者の地方移住は欧米ではごく自然なことで、盛んに行われています。リタイア前に各地を旅行し、気に入った場所を見つけ、いざリタイアし

たら、その土地に移住してセカンドライフを築いていくのです。



新宿御苑にて

3. ふるさとづくりはお気に入りの場所を見つけることから

第2の人生の場所を選ぶとき、大切なことはなんでしょうか？ 決め手となる条件は人によって異なりますが、誰もが「移り住んだら、自分の生活がもっと良くなる」ことを想像（期待）していると思います。

「暮らしが良くなる」とは、たとえば病院や市役

所、銀行、買い物などを便利に簡単に利用できたり、公共交通手段などのインフラが整っていたり、レクリエーションが充実していたり、自然や人のつながりが豊かであったりと、さまざまなことが考えられます。

見渡してみると、首都圏に限らず、日本各地には



新潟浦佐八色の森公園にて

インフラが非常に整った都市がたくさんあります。日本を旅行していれば、気に入った場所が必ずあるはず。その気に入った場所をどんどん見つけていくことこそ、「ふるさとづくり」の第一歩です。

4. 消極的では、ふるさとは見つからない

自分にとってお気に入りの場所を見つけるのですから、人任せにするなんてもったいないと思います。欧米に限らず、実は日本でも、自分の足でお気に入りの場所を見つけ、自らの意思で第2の人生を見つけて楽しく歩んでいる人がたくさんいます。

リタイア後の人生は10年、20年も続きます。その長い期間を過ごす場所探しに消極的になっては、せっかくの大切な時間を無駄にしていまいかねません。年齢に関係なく、自分の人生に積極的

に関わるという意欲と姿勢が「ふるさと」を見つける上で大切だと思います。



白川郷にて

5. 必要なのはQOL向上を求める個人のサポート

先ほども述べたように、「ふるさと」は楽しくて安心できてホッとして、落ち着ける場所です。そこには充実した暮らしがあり、イキイキした毎日、まさに「QOL (生活の質)」の高い生活ではないでしょうか。「ふるさと」は「QOLが高い暮らし」のある場所なのです。

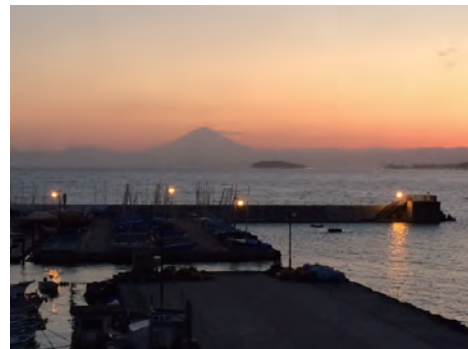
自分のQOLを高めるために、何をすればいいか、一番知っているのは自分自身です。周囲が「ふるさと」を提供してくれるわけではありませんし、

そうあるべきでもありません。

今、国やメディア、ひいては日本社会がすべきことは、個人が自らの意思と力で自分にとって一番の居場所を見つけられるよう、その人を後押しすること。住居や施設などを整えることももちろん重要ですが、個人が自ら積極的にQOLを高めたいような雰囲気づくりや意識啓発を行っていくことが急務だと考えます。



美濃市にて



葉山から見る富士山

日本のふるさとをステキに変える！

特定非営利活動法人グリーンバレー
理事長

大南 信也

徳島県神山町は、徳島市内から車で50分ほどの山あいに位置し、清流・鮎喰川に沿った美しい渓谷や1000メートルを超える山々など自然に恵まれた緑豊かな町です。山林が総面積の約83%を占め、かつては林業で一時代を築いたが、木材価格の低迷とともに町のにぎわいは消えてしまいました。1955年の昭和の大合併当時、2万1000人を数えた人口は、農林業の衰退に伴う都市部への流出によって減少の一途をたどり、現在は約6000人、高齢化率は46%に達している。

そんな過疎化の進む町で起こった二つの“異変”に全国からの視線が注がれています。その一つが、2010年10月を皮切りに、IT（情報技術）ベンチャー企業や映像制作会社など12社が町内にサテライトオフィスを設置したり、本社を移転したりしてきたことです。今もさらに、複数の会社が進出を希望しています。東京や大阪の企業が山あいの過疎の町に拠点を構えることなど、いまだきめったにありません。

なぜ過疎化や高齢化にあえぐ農山村の典型ともいえる町に、移住者ばかりでなく企業までもが集まり始めたのか。異変の要因として、快適なIT環

境、家賃や生活費の安さ、徳島市内からのほどほどの距離にあることが挙げられていますが、そうした条件とともにグリーンバレーが作り出すクリエイティブな「場」が、共感する人々や企業をひきつけているとの見方もあります。

グリーンバレーは「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに持ち、アートによるまちづくりの推進や、地域課題の解決、就業や起業支援などに加え、神山町から移住交流支援センターの運営を任されています。

活動のスタートは1990年に遡りますが、変化を生んだのは99年に始めた神山アーティスト・イン・レジデンス。毎年外国人を含む3名のアーティストを招聘し地域住民のサポートで作品を制作する事業です。二、三年すると滞在したアーティストが移住し始めました。グリーンバレーに移住支援のノウハウが蓄積されていきます。2007年、神山町移住交流支援センターの運営が委託されることになりました。しかし神山町には雇用の場が少ないので定住に結びつかないという問題がありました。そこで、仕事を持った人に移住してきてもらえればこの問題は解決できると「ワーク・イン・レジ

ダンス」を編み出します。空き家ごとに「この空き家にはパン屋さん！」「こちらにはウェブデザイナー！」といった具合に逆指名することによって、将来、町にとって必要な働き手や職種の人たちを集め、町をデザインしていこうと考えました。こうした取り組みにより、パン屋、藍染師、建築家、歯科医、映像作家、写真家など職人やクリエイターなどさまざまな職種の人材が神山町に集まり、2010年からは移住者だけでなく、ITベンチャー企業、映像、デザイン会社なども拠点を構えるようになりました。こうして町にこれまでなかった人の流れや循環

が生まれます。この新たな人の流れや塊が、ピストロ、ピザ屋、総菜屋やビジネス滞在客用ロッジなどのサービス産業を興しているのです。これらの店では、地域で生産されたオーガニック野菜が使われています。つまりアートを起点に興った人の流れが地方の本丸である農業を育み始めているの

だと思います。

これらさまざまな職能を持つ移住者、そしてサテライトオフィスを訪れるIT人材、クリエイティブな人たちが次々と集積し、循環する良質な場が着々と形作られ、これまで町を作り上げてきた人たちを新たに町に移ってきた人たちの力が加わり、新しいふるさとづくりが始まっているのです。



ふるさとを照らすサテライトオフィスの灯火

過疎化・高齢化が進む日本の地方は見方を変えれば「課題のフロンティア」です。日本の都市部や欧米、いずれアジ

ア諸国も同じ問題に直面します。言わば、未来の世界をのぞき見できるこの場所で、それらの共通課題を解決するモデルが生まれるとすれば、「日本のふるさと」が正真正銘の世界モデルとなる可能性を秘めていると感じています。

地方の挑戦 ～未来の大人たちとともに～

(株)百五銀行営業渉外部 顧問
皇學館大学現代日本社会学部 特命教授

岸川 政之

私の住む三重県多気町は、「高校生レストランのまち」として全国からたくさんの方にお越しただく元気な町として知られています。このレストランは、2002年10月に県立相可高校食物調理科調理クラブが運営する調理研修施設としてスタートし、現在は行列のできる店としても有名です。

高校生レストランは、公務員時代に取り組んだもので、中学を卒業するときに食の道に進もうと自分の夢を決め情熱を注ぐ生徒に感動し、この子たちに一番必要なステージは何かを考え、地元にある農産物と組み合わせて作りました。高校生が商売をするという前例のない取り組みは、大変なことも多かったのですがその分地域が一丸となりました。

2015年3月末に33年間勤務した三重県多気町役場を退職し、現在は、百五銀行および百五経済研究所でまちづくりアドバイザーや研究員として、

皇學館大学で地域再生論や公共政策論などを教える特命教授として、地方創生に伴う地域づくりや人材育成に力を注いでいます。

私は、これまでに全国を回り多くのまちづくりを見てきました。

そこで感じたのは、各地域の取り組みは一国一城の主のように単独で、他地域がモデルにできず、互いの連携も図れないその地域内だけの取り組みが多いということです。

例えば、マーチングバンドは世界中どこに行っても共通です。しかし、演奏する曲や使う楽器の構成、行進の隊形などは、各チームがオリジナリティーを発揮できます。今、日本に必要なのは、このように共通のレギュレーションを持ち、いつでも連携できる環境のもと、それぞれがオリジナリティーを発揮できる取り組みなのです。



高校生レストラン「まこの店」

ここでその一例として、若者が地域を愛し、地域の宝“人財”となるために地域をあげて取り組みを進めている三重県南伊勢町のSBP（ソーシャルビジネス・プロジェクト）を紹介させていただきます。

南伊勢町は、今後20年間で人口が半減するといわれ、三重県内でも過疎化や高齢化が最も進む町です。町内には県立南伊勢高校南勢校舎という普通高校があり、この高校を舞台に2013年4月に南伊勢SBPが立ち上がりました。人口減少が進む地方の1つの取り組みとして、高校生が中心となり、行政や民間企業などの協力のもと、地域資源を生かしたまちづくりやビジネスの提案などを行うことで地域を元気にし、地元に残り「ふるさと」を愛し守っていく人を増やそうというプロジェクトです。

これまでの主な取り組みとしては、以下の3つがあります。(2013年4月～2015年3月末)

- ①生徒たちが、地域の企業や団体などを取材しケーブルTVなどで紹介する「地域の宝探しプロジェクト」。
- ②町のゆるキャラ「たいみー」をタイ焼きのような型にし、祭りなどで実際に焼いて提供する「たいみー焼きプロジェクト」。
- ③町にある商品を生徒たちが選定しギフトをつくり、贈り物という形で、町のいいところを色々な人に伝える「ふるさとギフトプロジェクト」。

この取り組みは、「若者の地域定着」「地域活性化」「郷土愛の醸成」などの効果が期待され、既に沖縄県宮古島SBP（仕事クラブ）、同県西原SBPも設立され、今後全国に広がっていくことを期待しています。

また、うれしいことに廃校の危機に瀕していた同校は、新しい展開を始めています。普通科を二つのコースに分け、過疎化していく町をフィールドに高校生が地域資源を活用し、まちづくりやビジネスを考える「地域活性化戦略コース（仮称）」を併設しようという取り組みです。もちろん、新コースのイメージは、SBPがモデルです。現在は、町の全面協力も取り付け、具現化に向けて検討を進めている段階です。

地方創生においては、地域の宝である“未来の大人たち”を育てて行くことが大切です。

なぜなら「地域づくりやまちづくりは、人づくり」だからです。

ぜひ皆さん、一度多気町や南伊勢町にお越しください。そして、私たちの取り組みをご覧いただければ幸いです。



ゆるキャラ「たいみー」（鯛とミカンが名産です）



高校生レストラン「まごの店」にて

「ふるさとづくり」に必要な教育とは。

株式会社TMオフィス代表取締役 PRプロデューサー **殿村 美樹**

◆「地域ブランド戦略」の勘違い

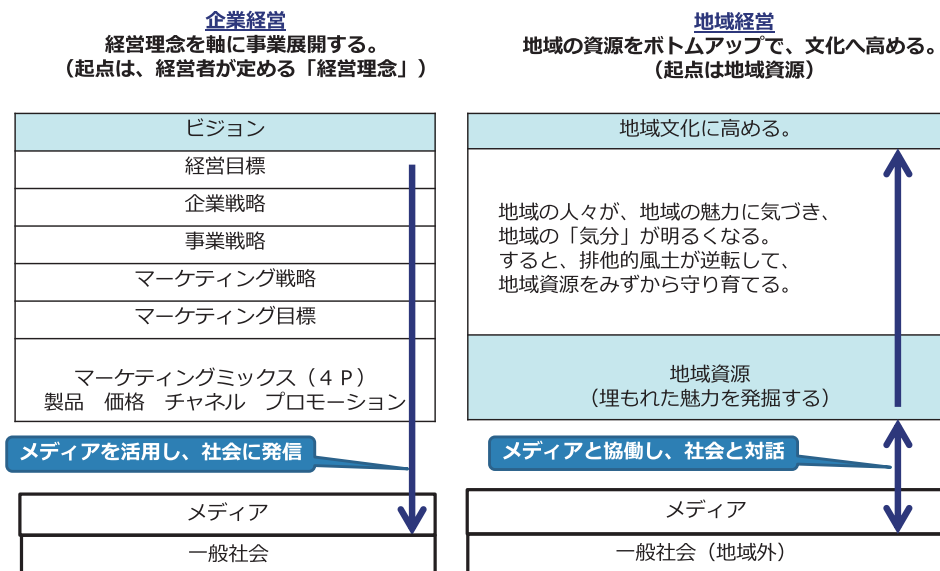
私は、約30年間、約2,700件の案件に携わった「地域ブランド戦略」の専門家である。その間、様々な地域で素晴らしい取り組みを見せてもらった。しかし最近、多くの地域で取り組まれている「地域ブランド戦略」については勘違いが多いと思う。「民間の良さを見習え」とばかりに企業ブランド戦略の考え方が導入されているからだ。

そもそも企業と地域では成り立ちも組織形態も異なる。仮に企業経営者と地域の首長を同じ「経営トップ」と位置付けて比較してみよう。企業では、

経営者が示したビジョンを社員たちが実現しようと“給与をもらって”働くが、地域ではいくら首長がビジョンを示しても住民は「税金を払っているのだから、自分はサービスを受ける立場だ」と受け身になってしまう。ブランドを構築するために最も重要な経営資源である「人」の動かし方が、企業と地域では異なるのだ。

結論から言えば、地域ブランド戦略は民主主義と資本主義の原則に照らしたボトムアップ戦略を考えるべきだ。そして生まれたブランドを持続可能な地域文化へ高めなければならないと思う。

「企業経営」と「地域経営」の違い



© miki.tonomura

では、どうすればいいのか。まずは「足利尊氏の墓」のエピソードを紹介したい。

「足利尊氏の墓」は京都の衣笠に佇む足利家の菩提寺「等持院」にある。それが、歴史上の大人物と

は思えないほど小さい。尊氏が亡くなった時、天皇に刃向った逆賊と見なす人が多かったため、「墓が大きいと壊される」と考えて、できるだけ小さく作ったという。その代わりに、天に上った尊氏から見

下ろすと日本一美しい墓に見えるよう、周囲に見事な池や庭がつくられた。菩提寺の役割は“今の価値観で”偉業を誇示することではなく、天に昇った尊氏に賛辞を送り、その偉業を後世に伝えることだからだ。

このエピソードはそのまま地域の活性化に役立つ。地域は今も歴史を刻み、文化を育てている。私たちはそんな地域をイキイキと持続させるために“今の価値観”に囚われることなく、「次世代に何を伝えていくのか」「今、何が一番大切なのか」を見極めなければならない。

◆全国にあふれる「ゆるキャラ」を幼児教育に生かす。

そのために、何から始めたら良いのか。私は幼児教育だと思う。日本の子供たちは、小学校に入ると高校までの12年間、「東京が一番」と刷り込むような教育(今の常識では仕方がないことだが)を受ける。だから若者が東京へ向かう流れは止めようがない。そんな中で、子供たちに地方の魅力を伝えるには、幼児のうちに“三つ子の魂 百まで教育”を行うしかないと思う。

奇遇にも今、幼児教育の凄腕先生が全国にあふれている。「ゆるキャラ」である。2007年、滋賀県彦根市のマスコット「ひこにゃん」が人気を集めたことからブームが巻き起こり、今や「ゆるキャラ」がない地域の方が少ない。しかしブームが落ち着いた今、その多くが持て余されている状況は否めない。

そんな「ゆるキャラ」だが、実は「幼児を無条件に惹きつける力」を秘めている。大きくて丸い顔が、赤ちゃんの時に見た“お母さんの丸い顔やおっぱい”を連想させ、幼児を本能的に惹きつけるのだ。「ゆるキャラ」を見た途端に幼児が走り寄り、あの惹きつけ力である。

このパワーを幼児教育に活用しないのは勿体ないと私は思う。

実はすでに検証を行っている。2012年、徳島市のゆるキャラ「トクシィ」を「阿波おどり先生」に任命し、市内外の保育園に通う幼児たちに教える活動を始めた。すると普段は集中しない幼児たち

が夢中になって踊り始めた。この活動はたちまち大評判となり、トクシィは3か月で1000人以上の幼児に阿波踊りを教えることになった。



徳島市の阿波踊り先生「トクシィ」

また、「天空の城」として知られる兵庫県朝来市の「竹田城跡」でも同様だった。「竹田城跡」のゆるキャラ「たけじい」が、普段は落ち着かない幼児たちだが「竹田城跡の歴史」を紙芝居で語りかけると夢中になって聞いたのである。ここでも絶大な効果が確認された。



天空の城「竹田城跡」の歴史を紙芝居で教える「たけじい」

◆「ふるさとづくり」は幼児教育から。

「ゆるキャラ」を活用した幼児教育は、おそらく大半の地域が明日からでも取り組めると思う。その時はぜひ、メディアを巻き込んで欲しい。子どもの笑顔はメディアを動かし、地域の魅力として全国に伝える要素になるからだ。現に徳島市のトクシィも朝来市のたけじいも、多くのメディアに取り上げられ、その報道は地域の人々を元気にした。

「ふるさとづくり」は幼児教育から。持て余している「ゆるキャラ」を活用して、地域の未来を担う子どもたちに「ふるさと学」を教えてみよう。

きっと、地域の歴史や文化を次世代へ伝える道標になると思う。

ふるさとをつくる若者たち

マネジメントオフィスHARADA代表 **原田 弘子**

私が都内の商社から転職し、タウンマネージャーとして仕事を始めたのは11年前、広島県の呉市でした。初めて呉を訪れたときには、JR呉線の車窓からの景色に目を奪われ、日本にこんなにきれいなところがあったのかと驚いたことを覚えています。呉市は海軍文化が残る、大人の懐の深さを感じるまちでした。その後勤務した広島県府中市は、人口約4万人の小さなまちですが、まちに迫る山と川、昔の栄華をしのばせる古くて豪華な建物、そこに暮らすチャレンジ精神旺盛な人たち、地方都市の豊かさの可能性を実感しました。その後も仕事を通じていろいろなまちにお伺いしますが、地方都市の美しさ、豊かさ、暮らす人々の力強さを意識せずにはられません。

地方の豊かさは、海外から日本を見たときにも大きな価値を持ち、日本の競争力のひとつであると感じています。これを守るため、活かすためにまち全体をどう使っていくか。しっかり考えて行動に移すこと、それがふるさとづくりに繋がると考えています。

どこのまちにも、そのまちの暮らしを愛し、まちを元気にしたい、まちの良さをたくさんの人に知ってほしいと思っているひとたちが、必ずいます。最近では、都会で会社員として働くのではなく、自然の多い地方でゆったり暮らしたい、家族との時間を大切にしたい、といった思いを持つ人も増えてきました。

こうした価値観の移り変わりの中でまちの未来をつくっていくには、どのような方法があるのでしょうか。広島県内の小さなまち府中市の、とあるNPOの取り組みをご紹介します。

【NPO法人府中ノアンテナ】

背景

広島県府中市はものづくりのまちとして、明治

から高度成長期まで多くの人々で賑わいました。近年は、多くの地方都市と同じく、人口が減少傾向にあります。まちなかには古い建物が残っており、中でも県の産業遺産に指定されている「旧平地呉服店」は和洋折衷のデザインで目を引くものですが、長らく空き店舗になっていました。

NPOの設立

不動産会社に勤務する男性がSNSを通じて当時ブームだった朝活（早朝勉強会）の参加者を募ったところ、30代を中心とした5～6人のメンバーが集まりました。時を同じくして、30代のUターン人材とその仲間が、長く開催されていなかった地元の夏祭りを復活させます。この2つの流れの有志が中心となって、継続的にまちを元気にしていこうと、NPO法人を設立しました。NPOの参加者はデザイナー、印刷、看板、IT関係など、広報PRのバックグラウンドを持つメンバーと、建築士、FP、中小企業診断士でした。メンバーの半分は隣の福山市在住です。

活動の開始

連日、NPOの理念、目的、事業案を話し合い、事業の柱を「情報発信」、「未来づくり」、「ネットワークづくり」の3つとしました。そして、府中の良さを発信するという意味を込めて「府中ノアンテナ」と名付けました。まちづくりといっても、資金がなければできません。府中ノアンテナでは、自分たちの力を使って金を稼いで、活動して行くことにしました。

事業内容

主な事業内容は以下の通りです。継続的に活動していくためにも、お金を稼ぐ事業とお金を使う事業、それぞれの収支は厳しくチェックしています。

●情報発信

HP、SNSの活用、フリーペーパーの発行のほか、メンバーの本職を活かして市や商工会議所の広報物のデザインやディレクションを受託しています。



新規創業者発掘マーケット「mimipic」

●未来づくり

府中の未来を担う子ども達を育てる事業。府中市の地域資源である家具、木工をベースに、家族で学習机をつくる「つくえ、つくろう」や、木のおもちゃ「KiTAS」の開発と販売など、地域産業を活かした商品開発と販路開拓、木育の推進を行っています。



商品開発つながるおもちゃ「KiTAS」

●ネットワークづくり

「旧平地呉服店」を拠点に、マーケットやカフェ、ワークショップや各種講座など様々なイベント

を開催しています。また創業支援事業を通じて商店街に開業した方も複数存在します。またこの収益金で「旧平地呉服店」の補修や修復を行っています。



旧平地呉服店
(現 府中ノアンテナ事務所)

府中ノアンテナの活動が多くの支援を集め、その輪はどんどん広がりを見せています。地元の方々の様々の努力と相まって、多くの古い空き家がリノベーションされ、新しい人たちが活躍を始めています。

お金がないなら稼げばいい。人がいないなら探してくればいい。そんなシンプルな発想で、まちの元気を作って発信していく。きっとみなさんのまちにも、柔軟な発想でまちをつくる若者たちが存在しています。彼らを見つけ、信頼することで、次の世代に引き継がれるふるさとがつくられていきます。

平成26年度の府中ノアンテナ事業一覧

| 情報受発信 | 未来づくり | ネットワークづくり |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| フリーペーパー (府中ノみんなピク編) | つくえ、つくろう。 2泊3日に! | 旧平地呉服店活用 (ノマド/縁側カフェ) |
| ウェブサイト (府中で暮らす) | 木育推進協議会 | みんなピク |
| みんなで作る | つながるおもちゃ KiTAS | 創業促進事業 |
| これからの木育で目指す事 | | |
| 教育の充実 木育プログラム 玩具教材の木質化 | 産業活性 木工産業活性化 新たな担い手の創出 | まちづくり 郷土愛・誇りの醸成 木育の街としてブランド化 |

「ロケツーリズム」と「ご当地グルメ」による “ふるさとのこし” ～人々の心の“ふるさと”を未来につないでいくために～

株式会社地域活性プランニング代表取締役 **藤崎 慎一**

《1》なぜ「ロケツーリズム」と「ご当地グルメ」なのか

東日本大震災のあと、ボランティアではなく、純粋に旅を楽しむために、一般の人たちの足を東北に向かわせたのは、大河ドラマ『八重の桜』と連続テレビ小説『あまちゃん』、2本のドラマでした。毎年年末になるとハローワークに通っていた橋野食堂のご主人が、6人で店を切り盛りするまでになったのは、昔から地元で食べられていたご当地グルメ「津山ホルモンうどん」がB-1グランプリに出場したことがきっかけでした。



ドラマ『あまちゃん』効果に沸いた岩手県久慈市のお座席列車

いくら手を変え品を変え頑張っても一向に成果が上がらない事例は山ほどあります。そんななか「楽しいこと、おいしいもので人は動く」

——。これは今まで地域活性に携わってきた私のゆるぎない確信です。人が動けば、お金が落ち、地元雇用が生まれる。そして、地域に活気が出る。

人が集まるためには効果的なPRが必要であり、映画やドラマ、テレビ番組ほど、今の日本において直接的に人々に訴えかけられる手段はありません。日本でもフィルムコミッション(FC)が多数立ち上りましたが、ただ撮影隊を呼ぶだけで消えていったFCも少なくありません。いかにシティセールスにつながるか、観光につながるかが必要なのです。

次に出てくるのが、集まった人々をいかに滞留させるかということ。そのためには昼食、夕食、そして翌日の朝食までその土地で食べてもらえることが理想です。

しかし、食べるものがなければ、景色をみたと、食事ができる隣町に移動してしまいます。旅先

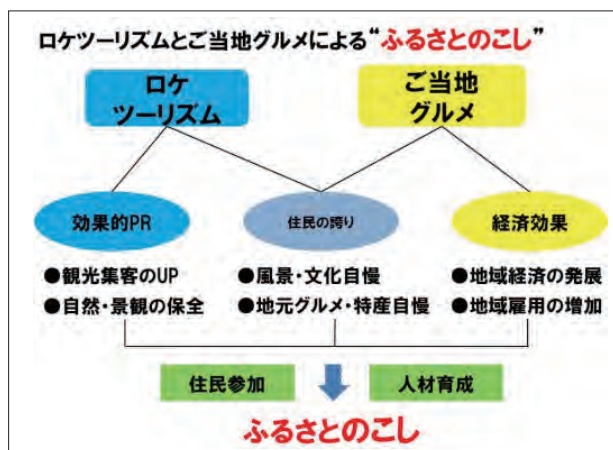
の最大の楽しみはその土地でしか味わえない「食」であり、それ自体が旅の目的になるわけです。

《2》ふるさとを自慢したくなる!? 自然発生的仕掛け

実際、ロケ地になると何がいいのか？ それはPR効果があるのはもちろんのこと、地元内での内面的変化の大きさにあると思っています。

自分の地元が映画やテレビに取り上げられると、誰かに自慢したくなる。自分や自分の家族が画面に映れば、なおさらのこと。画面を通してみる自分のふるさとは「こんなに素敵なおとこだったんだ」と新たな発見を生むのです。そして「当たり前だと思っていたこの風景は特別なんだ」と自然や景観の保全のため、自助努力が始まります。自然発生的な景観保全や、住民たちの誇りはそうそう簡単にできるものではありません。それが醸成された上、さらに撮影隊がやってきてお金を落とし、観光客もやってきて経済効果もあがる。何より映像として後世にずっと残るといふ何物にも代えがたい副産物も生まれ、一石二鳥どころか何鳥にもなるのです。

前述のとおり、「旅の楽しみ=食」といっても過言ではないほど、「食」は人々にとって大切なものです。しかも、直接的な経済効果を生み、雇用を生



むのがこの「食」です。なかでもご当地グルメは、その土地に根付いたものであったり、新しくできたとしても地域密着を打ち出しているのが、地元への波及効果は絶大です。そして、ロケと同様、自分のふるさと自慢につながる絶好のツールであり、住民の誇りに直結します。

つまり、「ロケツーリズムとご当地グルメによるふるさとのこし」とは、ふるさとの原風景や食文化に誇りを持ち、守っていききたい、残していききたいと思う「原風景のこし」であり、「食文化のこし」であり、「ふるさとづくり」そのものなのです。

《3》必要なのは「住民参加」と「人材育成」

羽田空港の国際化で危機感を持った千葉県成田市は、日本最大の国際空港と、初詣参拝客数国内2位を誇る成田山新勝寺の表参道、ニュータウンの三者がバラバラに共存していました。それが羽田に対抗するべく、組織の枠を超えた「成田空援隊」を立ち上げ、ロケ誘致やPRを行い、さらに市役所有志で立ち上がった成田ソラガールが地元事業者を巻き込みご当地グルメ「成田ソラあんぱん」を開発しました。この成田ソラあんぱんはJALの新路線就航の記念品となり、さらに3000店舗以上のローソンで商品化されました。



成田の新しい顔となった成田ソラあんぱん



河津桜と新たな観光資源「わさび丼」

河津桜で有名な静岡県河津町は、桜の季節に観光客が集中し、それ以外は閑古鳥だったことが悩みの種でした。しかし、ドラマ『孤独のグルメ』で「わさび丼」が紹介されるやいなや、「わさび丼」を求めて観光客が押し寄せ、ドラマ放送

までわずか2軒だったわさび丼が食べられるお店が15軒に急増。さらに地元の「わさび」そのものが見直され、わさびを使ったグルメ開発で、平成27年4月、まちおこし集団が株式会社化されています。

これらの私が関わった成功地域に共通していることは、官民一体の体制をとった「住民参加」と、よそ者・わか者・ばか者を活用した「人材育成」です。

結局、「国は何をしてくれるんだ?」「行政が動いてくれないからこうなった」と言っているようでは、地域活性の成功はありません。自分たちが危機感を持ち、住民たちが自ら動かないと、いくら行政が制度を整えても継続はしないのです。そのためには、人材育成が必須。私のような外部から整理をする「よそ者」を活用し、やる気に満ちている「わか者」たちが自由に動ける環境を作り、地元でがむらしやに動くアイデアマン「ばか者」が活躍できる組織が必要です。そして、住民たちは本業を持っているので、そこは事務局として行政がきっちり関わる。両輪で機能して、「ふるさとづくり」=「ふるさとのこし」が形になります。

そして、これらは知ってもらわないと何も始まりませんし、地元で頑張る人たちのモチベーションを継続するためにも、いかに彼らの発表の場、作ったものを発信していく場が、今後ますます必要になります。その場を提供することが、「よそ者」として関わる我々にできる最大の貢献となることでしょう。

世界に誇るふるさとはどこ? /

決定! “全国ふるさと甲子園”
ふるさと対抗! 全国「行きたいまち」決定戦
～第1弾『ロケ地&ご当地グルメ』編～

主催:「全国ロケ地&ご当地グルメ」推進協議会
後援:観光庁、復興庁、総務省、経済産業省、松竹儀、儀TMオフィス、ロケーションジャパン編集部
協力:ロケツーリズム連絡会、儀毎日映画社、跡見学園女子大学、儀ローソン、LJマルシェ
企画:NPOふるさと活性化隊、儀地域活性プランニング

＜決起人兼審査委員長＞
内閣総理大臣補佐官 **木村太郎** (ふるさとづくり推進担当)

平成27年8月7日(金)に開催される「全国ふるさと甲子園」は、地域の頑張りを発表する場。

ふるさとづくりと地方創生と何の関係があるのか？

豊岡市長 中貝 宗治

地方の貧しさと都市の豊かさ

なぜ人々は地方から大都市へと流れていくのか？

「貧しい地方と豊かな都市」という強烈なイメージが原因です。「貧しさ、豊かさ」には、経済的な格差のみならず文化的な格差も含まれています。AKBもサザンもないし、ポールマッカートニーも来ない。田舎は貧しく、つまらない。

人々は、豊かさを求めて都市へと流れていきました。

都市の空虚さと地方の豊かさ

しかし、逆の動きも出てきました。地域おこし協力隊などは、その典型例です。内閣府のアンケート調査でも、若年層の田園回帰志向がはっきりと出てきています。豊岡でも、若い女性がキャリア官僚の職を捨てて、海辺の地域に移り住むなんてことが起きています。

「都市における暮らしの空虚さと地方における暮らしの豊かさ」を見てとる人々が確実に増えてきた、ということだと思えます。

つながりの実感、豊かさの実感

では、地方の暮らしの豊かさとは何か？

地方に移住した人々の手記などを見ると、共通したのが見えてきます。それは、「つながり」です。地方では、人と人とのつながりを実感できる。農作業や山仕事などで自分が自然とつながっていることが実感できる。地域の祭りに参加することによって、自分が地域の伝統や歴史とつながっていることが実感できる。

つながりの中に役割があり、仮に会社の肩書がなくなったとしても自分がな何者かでありうる世界。そこに豊かさを見てとる人々が塊として出てきた、ということではないかと思えます。

つながりを実感できる地というのは、別の言葉でいうと、「ふるさと」です。

地方でもできる仕事、地方でしかできない仕事

でも、仕事はどうするのか？

今や東京にいなくてもできる仕事が増えてきました。豊岡に移り住んできた著名なマンガ家があります。今やマンガはコンピュータ上で描き、アシスタントや出版社の所在が東京であったとしても



木造3階建ての旅館街

一向に構いません。

ネットの普及で地球は急速に小さくなりつつあり、地方は東京を介さなくてもダイレクトに世界とつながり始めました。例えば、豊岡の城崎温泉は、木造3階建ての旅館街が特徴の、日本的情緒を色濃く持った温泉街です。伝統とのつながり、人とのつながりを大切にするまちづくりが行われてきました。外国人観光客が4年間で12倍に急増しています。ほとんど個人客です。グローバル化の進展で世界中が急速に同じ顔になり、文化的につまらない世界が広がりつつあります。だからこそ、固有なものが世界で輝くチャンスがあります。

その城崎温泉に、市はパフォーミングアーツに特化したアーティスト・イン・レジデンスの施設、城崎国際アートセンターを開設しました。最高3か月間、宿泊し、24時間稽古場とホールを使い、作品を創ることができます。すべて無料です。今、世界中からアーティストが、城崎温泉とアートセンターにひかれて、東京を飛び越えて来るようになりました。

つながりによって豊かさを実感できる場所で、やりがいのある仕事をする。地方創生のチャンスがここに 있습니다。

人口は減りつづけるのになぜ「創生」なのか？

政府の地方創生戦略は、うまくいっても日本全体の人口減少が止まるのは22世紀のことです。個々の地方も同様の傾向でしょう。人口減少は、今後も経済や社会にダメージを与え続けます。にもかかわらず、「創生」とはどういうことなのか？私は、人口減少緩和策をやる、そのやり方の中に秘密があると考えています。

地方は長らく、地方と都市との違いを「格差」と見てきました。しかし、例えば豊岡の暮らしに価値を見出す人々が豊岡に移り住み、また現に豊岡に住む人々も自分たちの価値に気づいて決然と生きていくようになれば、まちは質的変貌を遂げるのだと思います。

地方創生は、都市的豊かさを地方にも、ということではありません。地方には都市とは別の価値観に基づく豊かさがある、と確信をもってふるさとづくりを進める。それが個々の地方の「創生」につながり、日本全体としては多様性に富んだ魅力的な国として「創生」につながるのだと思います。もちろん、大都市の中の「地方」も含めてです。



城崎国際アートセンター

「ふるさと学」と地方創生

秋田大学地域創生センター准教授(兼)北秋田分校長 濱田 純

【「ふるさと学」の限界をいかに克服するか】

少子高齢化率全国トップランナーの秋田県は、将来の人口問題を平成の初めに予測し、教育面において「ふるさと学」(ふるさと教育)を刊行・導入し、先進的な取り組みをしてきた県である。その結果、どうであったのか。

秋田県は平成5年度から全校種における学校教育共通実践課題として、①ふるさとのよさの発見

②ふるさとへの愛着心の醸成 ③ふるさとに生きる意欲の喚起、を目指

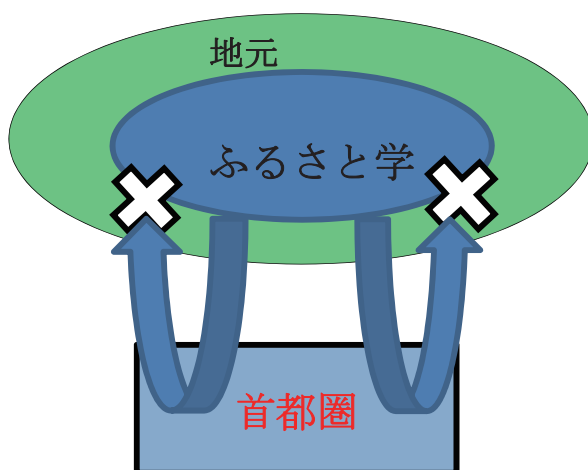
した総合学習「ふるさと学」(ふるさと教育)を導入・展開してきた。その結果、教育的ねらいは達成できたのであるが、日本の社会構造と首都圏一極集中の流れを止めることができず、多くの若者は進学・就職のため首都圏へと向かった。それでも、ふるさと回帰への期待があった。しかし、県外へ流出した若者がふるさと回帰の年齢となり、いざ秋田に戻ろうとしたとき、就職したいが企業不足、官公庁・大手企業への就職は狭き門で一層困難という現実が立ちふさがった。ふるさとに帰るに帰られず、若者は県外に留まらざるを得なかった。「ふるさと学」(ふるさと教育)には今一步の踏み込みが必要であった。それは、「ふるさとで起業し、ふるさとで生き抜くという強い気概と能力」の長期的育成である。

この現実に対し、秋田県内25市町村教育委員会は、地元ふるさとの存亡を掛けた「ふるさと学」(新ふるさと教育)に舵を切った。すなわち、ふるさと

教育とキャリア教育を融合させた「ふるさとキャリア教育」である。「ふるさとキャリア教育」は学校だけでは完結できない。オール秋田、オール自治体単位で進めなければ実現の可能性は低い。こうした中、秋田県は27年度の秋田版総合戦略素案において、雇用創出のための5つの成長分野を設定し、具体的な雇用創出数を掲げるに至った。

各自治体は、秋田県版総合戦略と連動させ、今後どう取り組んでいくのだろうか。「この地域に残さ

れた『唯一の財産』が子ども、教育こそが『最後の防波堤』と、5年前から学校、地域、保護者、行政、企業等が一体となって子どもへの投資を惜しまず「ふるさと創生」に取り組み、着実に成果を上げつつある自治体がある。その一つが秋田県大館市である。



【秋田県大館市の挑戦】

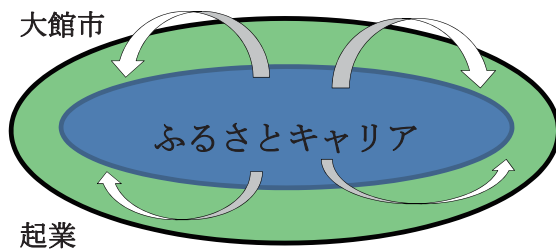
(<http://www.city.odate.akita.jp/kyouiku/top.html>) 以下、大館市教育委員会高橋善之教育長へのインタビュー形式とする。

(Q: 濱田 A: 高橋教育長)

Q1: 「ふるさとキャリア教育」への転換は、未来戦略の一環か?

A1: そうです。未来大館市民の育成が目的です。これまでの「ふるさと学」を基盤とした「ふるさと教育」は、ふるさとへの誇りや愛着心を培うことは有効であったが、ふるさとに根差して自立する気概と能力の育成には至らず、

その結果、人材の流出に歯止めをかけることはできなかった。そこで、ふるさと教育とキャリア教育の理念を融合し、アイデンティティーとなるべきふるさとの基盤の上に、それぞれの人生の進路を描かせること、すなわち「ふるさとキャリア教育」へと転換し、ふるさと観を「志を抱いて、自ら支えるふるさと」へと変容させたわけです。



Q2；大館市は地域や学校の特性を活かした「ふるさとキャリア教育」（百花繚乱作戦）が各学校で展開され成果を上げている。26年度だけでも、総理大臣表彰（大館二中）、文科大臣表彰（長木小）、博報告賞・文科奨励賞（釈迦内小）などを受賞している。最近では、成章中の3年生が総合学習で作成したレポートを内閣府の「構造改革特区・地域再生の提案募集」に応募したところ、石破大臣の目に留まり、これが縁で石破大臣から卒業式にビデオメッセージが寄せられたとのこと。その後、修学旅行の際、国会にて石破大臣から激励の言葉をいただいたとのニュースがあった。このように、子どもたちが地元への貢献策や振興策を考え、具体的に提案できるまで成長したのはどうしてか？

A2；大館市内に「ふるさとキャリア教育」の嚆矢ともいべき実践モデル学校があった。釈迦内小学校です (<http://www.oodate.or.jp/school/shakanai/>)。総合的な学習の時間を活用した「ひまわりプロジェクト」は、子どもたちがヒマワリを栽培し、その種子から絞った油を製品化・販売し、その収益金を活用し、4泊5日北海道漁村体験学習を実施するという、六次産業体験学習です。これは、企業家育

成教育に直結します。しかもこのプロジェクトを支えているは、地域の住民・企業が構成する実行委員会です。同校はこのような地域づくり・地域活性化が高く評価され、平成23年度には「地域づくり総務大臣表彰」を受賞しました。これをモデルに、他の学校・地域でも、地域の特性を生かした取り組みが活気づき、独自の教育活動が展開され、社会的使命感や社会改革力が培われるようになりました。

Q3；もう一つ見逃せない仕組みは24年度に設置した「子どもハローワーク」である。学校の事業所開拓の限界、学校の業務量の増大、子どもの職場選択肢の制限という、キャリア教育が持つ課題が大きく改善されようとしている。簡単に言えばどういう仕組みか？

A3；基本的に学校の教育課程以外の活動です。企業等からの依頼に基づき、日時（土日、長期休業）、場所、内容、人数等が記載された求人票が、各小・中学校の「子どもハローワーク掲示板」に掲示されます。子どもたちは自分の興味・関心に応じて体験を選択し、保護者の同意を得て教育研究所に申し込みます。体験当日は体験履歴が記録されている各自のキャリア・パスポート（図）を持参し活動します。昨年度は述べ2千名を超える子どもたちが活用しました。自分で探し、選んで参加することは、子どもたちの主体性や責任感を育むことにもつながり参加態度は真剣そのものです。体験を通して、仕事の厳しさ、工夫、努力、先人の知恵等に学び、働く大人に姿に憧れを抱き、尊敬の念を抱きます。多様な世代、職種の方々との出会いや交流体験は、子どもたちの未来大館市民としての自覚や自己実現意欲の源となるものと確信しています。



キャリア・パスポート

第3章

ふるさとづくり推進実践活動等の記録
(ふるさとづくりの全国発信)

ふるさとづくり有識者会議では、平成25年度以来、「ふるさとづくり推進実践活動」等を計21回、18地域において、全国の各ブロックをカバーし精力的に開催し、①「ふるさと学」の推進、②ふるさとづくりコーディネーターの育成、③全国のふるさとづくり推進組織との協働を中心した具体的な取組を積極的に進めるための活動を行ってきました。

平成25年

- 4月13-15日 ふるさとづくり現地調査(宮崎市)
ふるさとづくり現地調査(日向市)
ふるさとづくり現地調査(西都市)
ふるさとづくり現地調査(高千穂町)
(知事、自治体関係者、地域づくりグループとの意見交換、現地視察)

- 6月5日 ふるさとづくり現地調査(佐倉市)
(市、小学校関係者との意見交換、授業視察等)

- 6月19日 ふるさとづくり現地調査(長野市)
ふるさとづくり現地調査(中野市)
(知事、市関係者、NPOとの意見交換、現地視察)

- 10月4日 ふるさとづくり推進実践活動(小田原市①)
(市長、市関係者、NPOとの意見交換、現地視察)

- 10月14日 ふるさとづくり推進実践活動(岡崎市)
(市長、市関係者、まちづくり協議会との意見交換、現地視察)

- 11月10日 ふるさとづくり推進実践活動(南丹市①)
(市長、市関係者、まちづくり委員会との意見交換、現地視察)

平成26年

- 1月17日 ふるさとづくり推進実践活動(南丹市②)
(市長、市関係者、まちづくり委員会との意見交換、現地視察)

- 1月30日 ふるさとづくり推進実践活動(小田原市②)
(『城下町・小田原ブランド』戦略フォーラム参加)

- 2月22日 ふるさとづくり推進実践活動(南丹市③)
(美山フォーラム参加)

- 3月5日 ふるさとづくり推進実践活動(伊丹市)
(市長、市関係者、NPOとの意見交換、現地視察)

- 10月23日 ふるさとづくり推進実践活動(南城市)
(つきしろ自治会との意見交換、現地視察)

平成27年

- 1月21日 ふるさとづくり推進実践活動(河内長野市)
(市長、市関係者との意見交換、現地視察)

- 2月25日 ふるさとづくり推進実践活動(富山市)
(まちづくり協議会との意見交換)

- 3月25日 ふるさとづくり推進実践活動(南部町)
ふるさとづくり推進実践活動(平泉町)
(町長、町関係者、まちづくり委員会との意見交換、現地視察)

- 4月15日 ふるさとづくり推進実践活動(雲南市)
(市長、市関係者、コミュニティ協議会との意見交換、現地視察)

- 7月15日 ふるさとづくり推進実践活動(台東区)
(区長、区関係者、企業等との意見交換、現地視察)

現地調査 宮崎県西都市他

(1) 日程等

日 時：平成25年4月13日（土）～15日（月）

視察先：宮崎県宮崎市、日向市、西都市、高千穂町

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

河野宮崎県知事、後藤高千穂神社宮司、長友青島神社宮司、五ヶ村 村

おこしグループほか

(2) 開催地における取組の概要

- 宮崎県宮崎市では、記紀編さん1300年を記念して、観光キャンペーンやパンフレットの作成、神話を活用した発泡清酒「はじまり」の製造など、さまざまな面で神話を軸とした地域づくりを進めています。

また、市の策定した「青島地域活性化基本計画」のワーキンググループを母体として結成された「青島地域活性化プロジェクト」が、「ブーゲンビリア」の花を植栽する活動への参画、「キャンドルライトアップ」事業の展開など、青島地域の活性化・観光推進活動を展開しています。

- 宮崎県西都市では、国内でも最大級の規模を誇る西都原古墳群を祀る祭事として約600年前から続いていたまつりを、市内に住む若者が中心となって実行委員会を組織し、市民に親しまれ、他に誇れるまつり「西都古墳まつり」へと発展させました。

「西都古墳まつり」では、市内4神社に伝わる神楽を一堂に公開する「神楽まつり」、約1,000人の参加者が古代衣装をまとって行進する「たいまつ行列」、古代神話を題材とした4つの舞で構成される「炎の祭典」などが行われます。

- 宮崎県高千穂町では、五ヶ村村おこしグループが、地元産の小麦粉・小豆・サツマイモを使用した「天岩戸温泉団子」を開発・販売したり、夜神楽体験ツアー、刈干切り体験ツアーを開催し、都市住民と交流を行うとともに後継者育成も図るなど、地域づくりに取り組んでいます。



意見交換会



意見交換会

現地調査 千葉県佐倉市

(1) 日程等

日 時：平成25年6月5日（水）

視察先：千葉県佐倉市（佐倉市立白銀小学校、佐倉順天堂記念館）

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

大南委員、鎌田委員、後藤委員、濱田委員、原委員、原田委員、マリ・クリスティーヌ委員

浦田佐倉市副市長、小長井白銀小学校校長 ほか

(2) 開催地における取組の概要

○ 千葉県佐倉市では、市立小・中学校等における学校教育や公民館、美術館等における社会教育を通じて、佐倉の自然、歴史、文化、ゆかりの人物について学ぶことにより、郷土に対する理解と愛着を深め、将来に生かす「佐倉学」の取組を推進しています。

○ 学校教育においては、平成16年度から、市立小・中学校における総合的な学習や社会科、道徳の授業等において、「佐倉学」を位置付けています。

たとえば、平成25年度の佐倉市立白銀小学校の4年生の社会科の授業においては、佐倉藩主の堀田正睦^{ほったまさよし}から招かれて江戸から佐倉に移り、医学を中心として蘭学を学ぶ「順天堂」を開いた佐藤泰然^{さとうたいぜん}を取り上げるなど、学年ごとにテーマを決めて「佐倉学」に取り組んでいます。

○ また、社会教育においては、公民館において「佐倉学講座」を開設したり、美術館において佐倉との関わりの深い美術の分野で活躍した作家たちの作品を紹介する展覧会を開催するなどしています。



白銀小学校における「佐倉学」の授業を視察



佐倉順天堂記念館を視察

現地調査 長野県長野市・中野市

(1) 日程等

日 時：平成25年6月19日（水） 11時20分～12時00分

視察先：長野県長野市、中野市

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

大南委員、後藤委員、殿村委員、濱田委員、原委員、マリ・クリスティーヌ委員

阿部長野県知事、池田中野市長、NPO 法人夢空間・松代のまちと心を育てる会、中野地域づくり推進の方々
ほか

(2) 開催地における取組の概要

○ 長野県長野市及び中野市では、以下の組織をはじめとして、地域づくりに取り組む様々な組織が活動しています。

- ・ NPO法人夢空間・松代のまちと心を育てる会（長野市）

庭園都市松代の推進、まちなかの回遊性を高める寺巡りスタンプの整備、松代学講座の開催等の取組を行っています。

- ・ 豊田特産振興会（中野市）

豊田地域の特産品を造り、地域の振興を図るため、林業関係者、農業者等を中心に発足。豊田地域で開催されるふるさと祭り（5月）やもみじ祭り（10月）に、祭を盛り上げる中心的団体として参加しています。

- ・ ふるさとファーム（中野市）

子どもたちに「無農薬の地域の食材」を提供したいとの思いから、会員各自の畑で無農薬野菜等を栽培して学校給食の食材として提供し、食育を推進しています。

- ・ ふるさとコーラス（中野市）

高野辰之の作詞した「ふるさと」「朧月夜」などを、辰之が誕生した地で歌い継ぐため、豊田地域の女性が中心となり結成し、定期的に発表会を開催しています。



高野辰之記念館における意見交換会



長野県庁における知事との意見交換

ふるさとづくり推進実践活動 in 小田原

(1) 日程等

<第1回>

日 時：平成25年10月4日（金） 11時00分～13時30分

場 所：小田原市役所庁議室

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

後藤委員、濱田委員、藤崎委員、マリ・クリスティーヌ委員

加藤小田原市長、関野教育部長、諸星文化部長

奥村NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事長 ほか

<第2回>

日 時：平成26年1月30日（木） 14時00分～17時40分

場 所：小田原市役所全員協議会室

出席者：藤崎委員

講演：加藤小田原市長

民間（小田原箱根商工会議所、箱根物産連合会、からくり組合、小田原蒲鉾協同組合、小田原ひもの協同組合、小田原銘菓組合、小田原菓子商工業組合関係者等約50名） ほか

ワークショップ：小田原市関係者、民間約20名

(2) 開催地における取組の概要

- 神奈川県小田原市では、ふるさと小田原に学び、心豊かに生きる子どもの育成を目的とする『小田原の良さを生かした学習「おだわら・はーと」』を掲げ、例えば小学校4年生には理科副読本「小田原の自然」、中学校1年生には郷土読本「小田原」など、幼稚園から中学校までの発達段階に応じた郷土学習事業を実施しています。

- また、市内の全小学校で、小田原市出身の二宮尊徳の事績等を学習することにより、郷土の先人を愛する心を育てるとともに、自己の生き方の一助とすることを目的とした「二宮尊徳学習事業」を実施しています。

具体的には、社会科や総合的な学習の時間を活用し、二宮尊徳の事績や人となり等について、講話やビデオの視聴による学習を実施しています。市の施設である尊徳記念館の訪問等を行う学校もあります。

- さらに、小田原市主催の「城下町・小田原ブランド」戦略フォーラムの中で、ふるさとづくり有識者会議の藤崎委員が『まちの魅力を守る、伝える「ロケツーリズムとご当地グルメ」』をテーマに、地域活性の効果的なプロモーション戦略について講演やワークショップを行いました。



小田原市役所庁議室における意見交換会



「城下町・小田原ブランド」戦略フォーラムにおけるワークショップ

ふるさとづくり推進実践活動 in 岡崎

(1) 日程等

日 時：平成25年10月14日（月）14時00分～15時50分

場 所：岡崎市東部地域交流センター・むらさきかん（第6活動室）

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

後藤委員、殿村委員、原委員

内田岡崎市長、中安岡崎副市長、大竹岡崎市都市整備部部长

鈴木藤川まちづくり協議会会長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 愛知県岡崎市では、住民が自分たちのまちのことを自分たちで考え、さらに昔の宿場町の景観を残しながら住みよい魅力的なまちづくりを行うための住民自治組織「藤川まちづくり協議会」が、地域への誇りと愛着を育み、まちを語り案内できる地域住民の育成に取り組むなど、市と共同でまちづくりに取り組んでいます。
- 例えば、藤川まちづくり協議会が主催する「藤川塾」においては、これまで積み重ねられてきた藤川の歴史文化と現代との関わりを「くらし」「自然」「歴史」といった切り口から学び、今後のまちづくりに活かしていくために、外部から専門家を招いて講演を行ったり（平成24年度）、地域住民どうしがエリアごとに実際にまちを歩きながら案内を行い、互いに学びながら案内マニュアルをまとめる（平成25年度）などの活動が行われています。



岡崎市東部地域交流センター・むらさきかんにおける意見交換会



むらさき麦工房を視察

ふるさとづくり推進実践活動 in 南丹

(1) 日程等

<第1回>

日 時：平成25年11月10日（日）15時30分～17時10分

場 所：南丹市美山町自然文化村河鹿荘

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

小田切座長、後藤委員、殿村委員、濱田委員、原委員、マリ・クリスティーヌ委員

佐々木南丹市長、大野南丹市企画政策部長

岡西京都府副知事、中野京都府総務部長

中川 美山まちづくり委員会委員長

ほか

<第2回>

日 時：平成26年1月17日（金）14時35分～17時00分

場 所：南丹市美山農業振興総合センター

出席者：後藤委員、殿村委員、マリ・クリスティーヌ委員

佐々木南丹市長、大野南丹市企画政策部長

中川 美山まちづくり委員会委員長

ほか

<第3回>

日 時：平成26年2月22日（土）13時30分～16時30分

場 所：南丹市美山文化ホール

出席者：マリ・クリスティーヌ委員

佐々木南丹市長、大野南丹市企画政策部長

中川 美山まちづくり委員会委員長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 京都府南丹市では、高齢化率が40%を超える美山町において「美山まちづくり委員会」を設置し、町内の住民組織、第三セクター、広域法人が連携して、地域の課題の解決に向けた取組の企画・提言を行っています。
- 具体的には、行政、農業委員会、JA等から委員を集めた「これからの地域の農地・農業を考えるプロジェクト委員会」を発足させ、新たな農業振興策について議論を行ったり、美山町内外からの支援を通じて地域に合った参加型のまちづくりに資するための「頑張る美山応援基金」を創設したりといった活動を行うなどしています。
- また、今後のまちづくりを担う次世代の研修の場として、地域活性化の分野で活躍する方を招いての講演会「美山フォーラム」を開催するといった活動も行っています。

平成26年2月22日には、本有識者会議のマリ・クリスティーヌ委員が、第8回美山フォーラムとして「異文化交流とふるさとづくり」をテーマに基調講演を行いました。



南丹市美山町自然文化村・河鹿荘における意見交換会



南丹市美山文化ホールにおける「美山フォーラム」

ふるさとづくり推進実践活動 in 伊丹

(1) 日程等

日 時：平成26年3月5日（水） 11時00分～15時30分

場 所：白雪ブルワリービレッジ長寿蔵

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

大南委員、岸川委員、鎌田委員、後藤委員、殿村委員、原委員、原田委員、マリ・クリスティーヌ委員

藤原伊丹市長、太田伊丹市教育委員会事務局学校教育部長

山野小西酒造株式会社常務取締役管理本部長、村上 NPO 法人いたみタウンセンター理事長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 兵庫県伊丹市では、『読む・書く・話す・聞く』ことば文化都市伊丹特区」として、ことばと読書を大切にす特色ある教育に取り組んでいます。
- 具体的には、以下のような施策に取り組んでいます。
 - ・ 語彙力・コミュニケーション力の低下に対応するため、小学校3～6年生の生徒を対象として、俳句、詩や古典の暗唱、伊丹の民話、スピーチやディベートなどを通じて、ことばへの関心を高め、ことばの力を伸ばす科目「ことば科」を授業として実施しています。
 - ・ ことば蔵（伊丹市立図書館）において行う、読んで人に勧めたい本に自分オリジナルの帯を作成し、投票・審査によりグランプリを競う「帯ワングランプリ」や、テーマを決めてお勧めの本をプレゼンし、参加者の挙手によりチャンプを決めるイベント「ビブリオバトル」等の事業を実施しています。



白雪ブルワリービレッジ・長寿蔵における意見交換会



旧岡田家酒造を視察

ふるさとづくり推進実践活動 in 南城

(1) 日程等

日 時：平成26年10月23日（木）14時30分～15時30分

場 所：つきしろ自治会公民館

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

鎌田委員、後藤委員、原委員、マリ・クリスティーヌ委員

古謝南城市長、座波南城市副市長、具志堅南城市企画部長、兼島南城

市立船越小学校校長

田中沖縄県企画部地域・離島課長

新城つきしろ自治会長、秋本なんじょう地域デザインセンター所長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 沖縄県南城市では、つきしろ自治会が、今までコミュニティが形成されていなかった新興住宅地に、「健康づくり」をベースに時間をかけてつながりを作るなど、コミュニティ活動に取り組んでいます。

※ つきしろ自治会が実施した健康づくり関連事業の例

- ・ 「健康ニュース」の配布
- ・ 森林ウォーク、健康講演などの健康づくりを軸とした各種イベントの実施
- その結果、これまで統一されていなかった字名も、第一尚氏の守護神の名前にちなんで旧来から呼ばれていた地名である「つきしろ」に統一されました（平成25年4月）。
- 長年の取組による地域コミュニティの形成や、地道な健康づくり活動を通じて特定健診受診率を飛躍的に高めたことなどが評価され、平成25年度地域づくり総務大臣表彰を受賞しました。



つきしろ自治会公民館における意見交換会



つきしろ自治会公民館にて

ふるさとづくり推進実践活動 in 河内長野

(1) 日程等

日時：平成27年1月21日（水）12時50分～14時00分

場所：河内長野市役所701会議室

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

鎌田委員、後藤委員、原委員、マリ・クリスティーヌ委員

芝田河内長野市長、和田河内長野市教育長、中尾河内長野市教育委員会
教育推進部長、大江河内長野市教育委員会生涯学習部長、森河内長野市
教育委員会生涯学習部図書館長

山本河内長野市立学校校長会代表高向小学校長、松本河内長野市立学
校校長会代表加賀田小学校長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 大阪府河内長野市では、変貌する郷土の姿や発展するまちの様子を知り、河内長野市のよさを学び、自分の住む「河内長野」に誇りを持つ児童・生徒を育むため、郷土学習「ふるさと学」を実施しています。
- 具体的には、市内の全小中学校の教員等が手作りで作成した教材「かわちながの物語」を使用し、総合的な学習の時間を利用して、小学校5年生から中学校1年間の3年間にわたり、歴史・文化などの授業を行っています。

教材「かわちながの物語」の内容は、河内長野出身で遣隋使として中国に渡り、帰国後は「^{くにはかせ}国博士」という名の政治顧問として大化の改新後の新しい国づくりに力を尽くした^{たかむこのくろまる}高向玄理をはじめ、河内長野の文化財や社会的事象などを写真やイラストを使って解説したものとなっています。

- また、市内の全小中学校に電子黒板が備えられるなど、「ふるさと学」をはじめとする教育にICTを積極的に活用しています。

実践活動の際にも、学校現場と実践活動会場とをテレビ会議システムでつなぎ、生徒の作文の発表なども行いました。

- このほか、児童・生徒が「子ども解説員」として、自ら地域の文化財を解説する取組等を行っています。



河内長野市役所における意見交換会



河内長野市役所におけるテレビ会議を使用しての意見交換会

ふるさとづくり推進実践活動 in 富山

(1) 日程等

日 時：平成27年2月25日（水）14時10分～15時10分

場 所：おおながたに大長谷ふるさとセンター、八尾ゆめの森ゆうゆう館

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

後藤委員、殿村委員、濱田委員、原委員、原田委員

寺林富山県副知事

上田富山市農林水産部長

村上大長谷村づくり協議会理事長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

○ 富山県富山市では、急激な過疎化が進む中、平成17年にNPO法人「大長谷村づくり協議会」を設立し、山菜祭りなどの各種イベント等を通じた都市農村交流活動を行っています。

○ 平成22年には、協議会の下に、リピーターとなる都市住民を農援隊員（ボランティア）として集めた「ながたん農援隊」を発足させ、里山保全活動や豊かな自然を都市住民等が体験・体感する活動（グリーンツーリズム）に取り組んでいます。

農援隊員は、山菜園やキノコ園などにおける農作業に好きな時に参加し、報酬を受け取らない代わりに収穫物を持ち帰ることができます。

○ 「ながたん農援隊」の登録隊員数は100名を超えており、富山県内のみならず、関東・東海・関西まで広域的な交流が定着した点等が評価され、平成26年度に「ディスカバー農村漁村（むら）の宝」に選出されました。



「大長谷ふるさとセンター」視察



「八尾ゆめの森ゆうゆう館」における意見交換会

ふるさとづくり推進実践活動 in 南部

(1) 日程等

日 時：平成27年3月25日（水）9時00分～10時00分

場 所：バーデハウスふくち内 多目的ホール

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

鎌田委員、後藤委員、原委員

青山青森県副知事

工藤南部町長、坂本南部町副町長

佐々木達者村づくり委員会委員長、坂本達者村ホームステイ連絡協議
会会長、沼畑 NPO 青森なんぶの達者村 代表理事、川守田達者村農業観
光振興会会長、源田地域おこし協力隊員、岩城地域おこし協力隊員

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 青森県南部町では、以前よりグリーン・ツーリズムに力を入れていたが、農山漁村での余暇・リフレッシュにとどまらず、将来的な来訪者の長期滞在や定住受入れも視野に入れ、平成16年、町内にバーチャルビレッジ(疑似農村)である「^{たっしやむら}達者村」を開村しました。
- 「達者村」では、具体的には、農家が簡易宿泊営業を取得し、現役農家の家に泊まって現地の暮らしを体験できる「農業体験ホームステイ」や、農業体験修学旅行等の受入れなどを行っています。
- また、総務省の地域おこし協力隊制度を活用して2名の若者を受け入れており、「NPO法人青森南部の達者村」の活動支援や、イベント・広報活動等に従事しています。



バーデハウスふくちにおける意見交換会



バーデハウスふくちにおける意見交換会

ふるさとづくり推進実践活動 in 平泉

(1) 日程等

日 時：平成27年3月25日（水）14時45分～15時45分

場 所：平泉町役場庁議室

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

鎌田委員、後藤委員、原委員

青木平泉町長

小野寺 NPO 法人みんなでつくる平泉理事長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 岩手県平泉町では、平成23年(2011年)に世界文化遺産に登録された「平泉の文化遺産」を生かしたまちづくりについて、平泉町や NPO 法人などが協働して取り組んでいます。
- 具体的には、平成25年7月5日に認証されたNPO法人「みんなでつくる平泉」が、県や町と連携し、『世界文化遺産登録「3周年記念前夜祭」』を主催する他、「まちづくり講演会」や文化・歴史に関する生涯学習活動、観光ガイド研修会など幅広い活動に取り組んでいます。
- また、平泉町では、「平泉の自然と歴史を生かしたまちづくり景観条例」を策定し、世界遺産を核としたまちづくりを進めていますが、NPO法人「みんなでつくる平泉」は町民等に対するアンケート結果を町に提出し、アンケート結果を町の景観保護行政に反映するよう求めるなど、町民の意見を反映したまちづくりを目指しています。
- 実践活動の際には、世界文化遺産に登録されている中尊寺の視察も行いました。



平泉町役場における意見交換会



平泉町役場における意見交換会

ふるさとづくり推進実践活動 in 雲南

(1) 日程等

日 時：平成27年4月15日（水）13時30分～14時40分

場 所：波多交流センター2階 研修室

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

後藤委員、殿村委員、原委員、マリ・クリスティーヌ委員

小林島根県副知事

速水雲南市長、藤井雲南市副市長

波多コミュニティ協議会 山中 会長

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 島根県雲南市では、「協働のまちづくり」をまちづくりの基本に据え、概ね学校区単位で地縁組織「地域自主組織」を編成し、住民がまちづくりに参画・協働する「小規模多機能自治」を掲げています。
- 具体的には、地域自主組織が30組織(平成27年4月現在)結成され、福祉、保育、伝統文化の継承などさまざまな地域課題を自ら解決するとともに地域の振興を図っています。
- 例えば、地域自主組織「^{はた}波多コミュニティ協議会」では、地区内に唯一あった商店が閉店し、交通弱者から不安の声が上がったことを受けて、旧小学校を改装して作られた交流センターの中にマーケット（「^{はた}はたマーケット」）を運営し、地域コミュニティの買い物支援として活用されています。
- また、^{いるま}入間コミュニティ協議会では、旧小学校を増改築した「入間交流センター」を体験型宿泊施設として運営し、通学合宿、夏休みこどもツアー、各種研修会、銭太鼓教室、田舎料理実習、カフェ・ランチの提供等を実施しています。



波多交流センターにおける意見交換会



はたマーケットにて

ふるさとづくり推進実践活動 in 台東

(1) 日程等

日 時：平成27年7月15日（水）14時20分～15時20分

場 所：台東デザイナーズビレッジ2階 会議室

出席者：木村内閣総理大臣補佐官

小田切座長、後藤委員、原委員

服部台東区長

鈴木 台東デザイナーズビレッジインキュベーションマネージャー（村長）

奥村氏（nico design）

ほか

(2) 開催地における取組の概要

- 東京都台東区は、ファッション関連ビジネス分野での起業を目指すデザイナーを支援する施設として、2004年4月に旧小学校の校舎を活用して「台東デザイナーズビレッジ」を設置しています。
- 具体的には、靴、バッグ、アクセサリ、アパレル等のファッション関連産業の分野で事業を起し、自立しようというデザイナーを対象として、事務所や制作室等を無料・低額で提供したり、インキュベーションマネージャー（村長）を核として、経営、マーケティング、ネットワーク作り等の支援など、ハード・ソフト両面からの支援を行っています。その結果、平成27年度までに台東デザイナーズビレッジを卒業した63社のうち28社が台東区内にショップ、事務所等を構えています。
- 台東デザイナーズビレッジ周辺は、靴、かばん、アクセサリ等のファッション雑貨関連産業が集積する地域であり、この地域資源を活かして、優秀なデザイナーを集めることにより、「ものづくりの街」として地域の活性化や地域の元気づくりに取り組んでおり、都市部における「ふるさとづくり」として注目すべき取組です。



台東デザイナーズビレッジにおける意見交換会



台東デザイナーズビレッジにて

第4章

表彰・イベントの実施等

1 ふるさとづくり内閣総理大臣表彰

(1) 創設経過について

「ふるさとづくり」有識者会議報告(平成26年3月27日)において、ふるさとづくりを推進していく上で、ふるさと学の展開、ふるさとづくりコーディネーターの育成、全国のふるさとづくり推進組織との協働の取組が特に重要と指摘され、ふるさとづくり推進組織との協働の取組を進めるにあたり、「ふるさとづくり」に取り組む方々の励みになり、様々な活動がより一層活性化するように、全国の「ふるさとづくり」の取組のなかから、他のモデルとなるような特に先進的な活動を行っている団体又は個人を表彰することが提言されました。

「ふるさとづくり」有識者会議報告の提言を踏まえて、政府一体となってふるさとづくりに取り組むため平成26年5月8日に設置された「ふるさとづくり推進に関する関係省庁会議」において、地域のシンボルとなっている祭りや地域のイベント及びふるさと学の推進や地域の担い手の育成など、息の長い取組を行っている団体や個人等を表彰することとし、表彰趣旨に沿って検討した結果、「地域づくり総務大臣表彰」と「ふるさとイベント大賞」の2つの表彰制度にそれぞれ内閣総理大臣賞を創設することとなりました。なお、「地域づくり総務大臣表彰」については、内閣総理大臣賞の創設により「ふるさとづくり大賞」と名称を変更しました。

ふるさとづくり大賞について

全国各地で、それぞれのところをよせる地域「ふるさと」をより良くしようと頑張る団体、個人を表彰することにより、ふるさとづくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築を図ることを目的とし、顕著な功績のある団体(地方公共団体含む。)、個人、試験研究機関を表彰。

ふるさとイベント大賞について

全国各地で数多く開催されている地域の活力を生み出すイベントを表彰し、ふるさとイベントの創造・発展を促すことで、地域固有の風土・伝統・暮らしを守るとともに、地域に対する愛着と誇り育み、内外との交流につながる地域の活性化を図ることを目的とし、祭りなどの伝統芸能、芸術祭、産業祭などのジャンルは問わず、地域で実施されるイベント(主催者)を表彰。

(2) 選定過程等について

① 「ふるさとづくり大賞」選考経過

学識経験者14名から構成される「ふるさとづくり懇談会」において、都道府県等より推薦のあった、127団体を審査し、大賞(内閣総理大臣賞)として株式会社鹿渡島定置^{かどしまていち}(石川県七尾市)、優秀賞(以下、総務大臣賞)として、NPO法人グリーンバレー(徳島県神山町)と長野県木島平村の2団体が選定されたほか、団体表彰として18団体、地方自治体表彰として2団体、個人表彰として5名、試験研究機関表彰として3団体の合計31の団体、個人が選定され決定されました。

【ふるさとづくり懇談会】

| | | |
|------|--------------|------------------------------------|
| 座長 | 月尾 嘉男 | 東京大学名誉教授 |
| | 飯盛 義徳 | 慶應義塾大学総合政策学部教授 |
| | 楓 千里 | (株)JTBパブリッシング執行役員・ソリューション事業本部副本部長 |
| | 後藤 千恵 | 日本放送協会 解説委員 NHK放送文化研究所メディア研究部副部長 |
| | 椎川 忍 | 一般財団法人 地域活性化センター理事長 |
| | セーラ・マリ・カミングス | (株)文化事業部代表取締役 |
| | 関 幸子 | (株)ローカルファースト研究所代表取締役 |
| | 萩原 なつ子 | 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授 |
| | 林 勇二郎 | 国立高等専門学校機構 特別顧問 |
| | 深尾 昌峰 | 特定営利法人きょうと NPOセンター常務理事 龍谷大学政策学部准教授 |
| | 前田 香保里 | (株)ANA総合研究所研究員 |
| 座長代理 | 政所 利子 | (株) 玄 代表取締役 |
| | 横石 知二 | (株)いんどり代表取締役 |
| | 渡邊 英彦 | 一般社団法人 愛Bリーグ本部代表理事 |

② 「ふるさとイベント大賞」選考経過

学識経験者等9名から構成される「ふるさとイベント大賞選考委員会」において、172件の応募のうち都道府県から推薦のあった111件を審査し、大賞として塩竈^{しおがま}みなと祭(宮城県塩竈市)、最優秀賞(総務大臣賞)として奥能登珠洲の秋祭り、「ヨバレ」を選出したほか、優秀賞3、ふるさとキラリ賞3、選考委員特別賞1の合計9イベントが選定されました。

【ふるさとイベント大賞選考委員会 委員】

| | | |
|-----|--------|-----------------------------------|
| 委員長 | 北川 フラム | アートディレクター (株)アートフロントギャラリー代表取締役 |
| | 内原 智史 | ライティングデザイナー 内原智史デザイン事務所 |
| | 楓 千里 | (株)JTBパブリッシング執行役員・ソリューション事業本部副本部長 |
| | 竹下 景子 | 女優 |
| | 吉本 光宏 | (株)ニッセイ基礎研究所 主任研究員・芸術文化プロジェクト室長 |
| | 安齋 尚志 | NHK制作局長 |
| | 橋本 光男 | 全国知事会議事務総長 |
| | 原田 淳志 | 総務省大臣官房地域力創造審議官 |
| | 椎川 忍 | 一般財団法人 地域活性化センター理事長 |

③ 選考結果について

それぞれ上記の経過を経てふるさとづくり大賞には、石川県七尾市において、伝統漁法を承継しつつ、若手後継者の育成確保、地域資源を生かした6次産業化などの取組が評価された「株式会社鹿渡島定置」が、ふるさとイベント大賞には、宮城県塩竈市において、地域の自然などを生かした荘厳かつ勇壮な様子や地域の担い手を中心となり様々な工夫を加えながら企画・運営され、東日本大震災の発災年においても中止することなく実施されるなど、多くの市民の支援、参加の下で実施され続けていることなどが評価された「塩竈みなと祭」が選出されました。

ふるさとづくり大賞

かどしま ていち
株式会社 鹿渡島定置

石川県 ^{ななお}七尾市

概要

魚価の低迷等、漁業の操業環境が厳しい状況において、単に魚を獲るだけではなく、付加価値を付けるため、魚の鮮度を長く維持できる「神経締め」等の先進的な技術を導入し、インターネットを活用した直接販売を行うとともに、加工施設を設け、厄介者扱いされていた海藻を「海のじねんじょ」という人気商品にするなど、6次産業化により収益を伸ばし、地域の雇用創出に貢献している。

また、漁業従事者の高齢化が課題となっている中、見て覚える昔ながらの風習から脱却し、作業のマニュアル化や社員研修の開講等により、海外からの研修生を含む若手後継者の育成に取り組むとともに、台湾など海外への技術の伝授にも貢献している。また、昇格には立候補制を導入するなど実力主義の導入により、30歳代の船頭、20歳代の社員8名を含む社員15名の平均年齢が34歳と、若い社員の多い活気ある会社である。

評価された点

- 新技術（神経締め、海水シャーベット氷製造機）の積極導入による付加価値の向上。
- 地場資源を生かした6次産業化の取組み（加工品の開発・販売）。
- 漁労作業のマニュアル化、定置網の研修による後継者育成。
- 実力主義の導入（昇格の立候補制等）による若者雇用の拡大（社員の過半数が20歳代）。
- 海外への技術伝授（台湾、スリランカ。漁労長（漁の責任者）を5名育成。）
- 伝統的漁法の承継。
- 直販所開設など買物難民対策に一役買うなど地域への貢献。



ふるさとイベント大賞

しおがま
塩竈みなと祭 (塩竈みなと祭協賛会)

しおがま
宮城県 塩竈市

概要

「塩竈みなと祭」は、「陸奥国一ノ宮」志波彦神社・鹽竈神社の2基の御神輿を乗せた御座船「龍鳳丸」「鳳凰丸」が100隻もの御供船を従え、日本三景松島湾内を巡幸する海上渡御の勇壮な祭りで、日本三大船祭り※に数えられている。

※管絃祭(広島県厳島神社)・貴船まつり(神奈川県貴船神社)

木々に囲まれた神秘的な雰囲気のある、急高配の202段の石段という鹽竈神社表坂の舞台を、氏子たちが重さ1トンもある御神輿を担いで駆け上がる姿は、荘厳かつ勇壮で見るものを圧倒する。

戦後の昭和23年、産業復興と住民を勇気づけるために始まった祭りは今年で67回目となる。

東日本大震災の年も中止の危機を乗り越え、震災を受けた地域に活気と勇気をもたらし、地元の伝統民謡である「塩釜甚句」からイメージを広げて作った曲に合わせて、3000人以上が陸上パレードや踊りコンテストに参加し、民謡、地域外の伝統芸能の披露のほか、前夜祭では花火大会が開催され、市民総参加の祭りに発展している。



評価された点

- 東日本大震災で中止の危機に迫られたが、継続(67回目)して実施。被災地の復興の象徴。
- 例祭行事としての小さな祭りが豪華絢爛な海上渡御を行う祭りとして発展。
- 重さ1トンの御神輿を担いで階段を駆け上がる姿と「塩釜甚句」の交響は、人々の五感に訴え、祭りの祝祭性を浮かび上がらせている。
- 海と山の恵みを活かしながら工夫された地域の伝統行事として、地域の魅力を発信。
- 市内全体で商業の活性化が実現。
- 食に関しては鮪の町ならではのイベントも盛り込まれ大盛況。
- 地域住民の郷土意識の高揚と地場産業の振興などの波及効果。
- 運営は地元青年会議所等4団体の地域の若い担い手が中心となり、共同で企画し実行。
- 地域住民やボランティアの積極的な参加と協力体制の確立。
- 震災後支援をいただいている多くの自治体が祭りに参加するなど、さまざまな交流や連携がおこなわれ、さらに将来の発展性が期待。



(3) 内閣総理大臣賞表彰式について

内閣総理大臣賞の表彰式は、衆議院解散直後となった平成26年11月26日に内閣総理大臣官邸大ホールにおいて、菅内閣官房長官、木村内閣総理大臣補佐官、二之湯総務副大臣のご臨席の下、栄えある第1回目の受賞者に選定された「株式会社鹿渡島定置」(石川県七尾市)、「塩竈しおがまみなと祭まつり協賛会」(宮城県塩竈市)の関係者をはじめ、総理大臣の下に設置されている「ふるさとづくり有識者会議」、「ふるさとづくり懇談会」、「ふるさとイベント大賞選考委員会」の有識者の他、関係省庁幹部など総勢約100名の参加の下で挙行されました。

はじめに木村内閣総理大臣補佐官より、今回新たに内閣総理大臣賞を創設したことについて、安倍総理より「ふるさとづくり」の活動に携わる方々の励みとなるような表彰制度を創設するよう指示があり、「ふるさとづくり大賞」と「ふるさとイベント大賞」の2つに内閣総理大臣賞を交付することにより、ふるさとを愛する気持ちを育み、誇りあるふるさとを取り戻すような「ふるさとづくり」をさらに推進していくこととした旨お話をいただきました。

次に、ふるさとづくり懇談会の政所利子座長代理より、「ふるさとづくり大賞」に選出された、(株)鹿渡島定置の取組について、ア)高齢化や後継者不足などの深刻な課題を抱え苦境に立っている漁業に、神経締めしんけいじめの技術などの鮮度管理の技術を積極的に導入し、付加価値をつけた直接販売や自ら加工施設を設け6次産業化に取り組んでいること、イ)さらに、知識のマニュアル化や研修を積極的に行うとともに若者が働きやすい環境を整えるなどの取組により、若手後継者の育成にめざましい成果を上げているほか、海外研修生も受け入れるなど、伝統漁法である定置網漁の技術を継承し、海外へ広めるなど日本の漁業の可能性を改めて示し、若者に「しごと」と「夢」を与えており、漁業に限らず全国の「持続型地場産業」のモデルとなる非常に優れた取組である旨の紹介がされました。

続いて、ふるさとイベント大賞選考委員会の北川フラム委員長より、「ふるさとイベント大賞」に選出された、塩竈しおがまみなと祭について、ア)終戦直後から塩竈の産業復興と住民の元気回復のために始められ、鹽竈神社の例祭行事としての小さな祭りから、現在では、塩釜港において御座船を筆頭に100隻もの供奉船を従えた豪華絢爛な海上渡御が行われるなど、地域の特性を活かしながら、厳しい自然に折り合い、親しんでいった永い生活の

かさなりが結晶している勇壮な祭りとなっていること、イ) 企画・運営は地域の担い手である複数の地元の青年団体が共同で企画・実行し、日本有数の生マグロの水揚げ量を誇る地域であることを活かしマグロの兜焼きの振舞いのほか、伝統的な「塩竈甚句」を元に、世界的ギタリストの寺内タケシ氏作曲による「よしこの鹽竈」にあわせ踊るコンテストの実施など多くの創意工夫が加えられていること、ウ) 東日本大震災の発災年においても中止することなく実施されるなど、多くの市民の支援、参加の下で実施され続け、今では塩竈市の復興の象徴として、全国から多くの参加があるなど地域経済の活性化はもとより連携や交流が広がっていることなどが紹介されました。

その後、菅内閣官房長官よりそれぞれの代表者に表彰状及び楯が授与され、菅官房長官から、表彰は安倍総理の肝いりで創設されたこと、地方にはすばらしい文化や産業はもとより様々な資源や可能性があるにもかかわらず十分に活用されず元気を失っているところも少なくないが、その中で、それをなんとか変えていきたいと懸命に努力し、成果を出されている方々も数多くいること、そういった頑張る人や地域が報われる社会を創るためにも、政府一丸となって、ふるさとづくりや元気な地域づくりに取り組んでいく旨の御挨拶をいただきました。

その後、受賞者を代表して塩竈みなと祭協賛会の皆さんより、海上渡御など勇壮な祭りの様子を背景に、「よしこの鹽竈」が披露され、引き続き小ホールにおいて記念懇談会が開催されました。



司会の木村内閣総理大臣補佐官



政所ふるさとづくり懇談会座長代理のご挨拶



選考理由を述べる北川ふるさとイベント大賞選考委員会委員長



菅内閣官房長官からの内閣総理大臣賞の授与





菅内閣官房長官と内閣総理大臣賞を受賞した(株)鹿渡島定置の皆さん





菅内閣官房長官と内閣総理大臣賞を受賞した塩竈みなと祭協賛会の皆さん





菅内閣官房長官ご挨拶



「塩竈よしこ連」の皆さんによる演舞



「塩竈よしこ連」の皆さんによる演舞







展示パネルの説明を受ける菅内閣官房長官



2 全国ふるさと甲子園

(1) 「全国ふるさと甲子園」の開催趣旨等について

「全国ふるさと甲子園」は、平成27年8月7日（金）に都市センターホテル（東京都千代田区）で開催されました。このイベントは、有志の方々が運営事務局を担い、木村太郎内閣総理大臣補佐官（ふるさとづくり推進担当）が決起人代表・審査委員長、藤崎愼一 ふるさとづくり有識者会議委員が実行委員長として参画し、有識者会議委員である小田切徳美座長、岸川政之委員、後藤孝典委員、殿村美樹委員、濱田純委員、原範子委員、原田弘子委員及びマリ・クリスティーヌ委員も決起人として名を連ねました。跡見学園女子大学の学生の皆さんも含めて多くの有志の方々がボランティア・手づくりで作り上げたイベントです。

このイベントのコンセプトは、「美しいふるさとの誇りを守る“ふるさとのこし(残し)”」であり、映画の舞台を訪ねるロケツーリズムと、ふるさとの自慢のご当地グルメにより、効果的PRを行い、住民の誇りを取り戻し、経済効果をもたらすことを目的としたイベントです。日本が誇るふるさとはどこ？ということで、ロケ地とご当地グルメのセットで全国のふるさとが競いあうものです。

人気ドラマや映画の舞台となった全国の地域から55団体が集結・参加し、話題のご当地グルメを満喫しながら、来場者の投票により「行きたくなったふるさと No. 1」を決定する楽しいイベントとして開催されました。

(2) 「全国ふるさと甲子園」の開催結果について

全国から名乗りをあげた55団体がふるさとブースを設置し、人気ドラマや映画のロケ地と関連させた観光PRや、話題のご当地グルメ・特産品の販売を通して競い合い、最終的には約1,200人（主催者発表）が来場し、「行きたくなったふるさと」を投票しました。

開会式及び閉会式は、木村内閣総理大臣補佐官が出席し、各地域の関係者をはじめ、本イベントの決起人など大勢が参加して行われました。

決起人代表・審査委員長である木村内閣総理大臣補佐官からは、「このイベントの後は、それぞれのふるさとに実際に行って、身体で、目で、耳でその素晴らしい風景を体験し、ご当地のグルメを堪能していただきたい。今日がその大きなきっかけになる日であってほしい。」とご挨拶がありました。

また、安倍内閣総理大臣からのメッセージが次のとおり紹介されました。

【安倍内閣総理大臣 ご挨拶】

『「全国ふるさと甲子園」の開催にあたり、お祝いのご挨拶を申し上げます。

私は、「ふるさと」を愛する気持ちを育むことは、日本人としての誇りを取り戻し、世界からも信頼され、豊かな国としての我が国の更なる成長にもつながるものと考えます。

そのような考えにより、「ふるさと」とはどうあるべきかについて、木村太郎内閣総理大臣補佐官（ふるさとづくり推進担当）を中心に、「ふるさとづくり有識者会議」でご議論いただきました。

このイベントは、ふるさとを愛する方々による、全国のふるさと対抗のイベントです。特にふるさとづくりに意気を感じている方々が、ボランティアで作り上げてきているすばらしいイベントであり、心強く思っています。

このイベントを機会に、更にふるさとを愛する気持ちが育まれていくことを期待しています。』

閉会式においては、来場者による投票によって決定された次の7団体に対して、受賞の発表と、審査委員長である木村内閣総理大臣補佐官をはじめとするプレゼンターからの表彰状の授与が行われました。

【受賞団体 一覧】

○全国ふるさと甲子園「行きたくなったふるさと」大賞 グランプリ

兵庫県淡路県民局/一般社団法人淡路島観光協会/淡路島フィルムオフィス（兵庫県淡路島）

撮影された作品：「種まく旅人 くにうみの郷」

ご当地グルメ／お土産：玉ねぎソテー、玉ねぎスープ、玉ねぎ、味付け海苔他

○全国ふるさと甲子園「行きたくなったふるさと」大賞 準グランプリ

河津町商工会 河津わさびで泣かせ隊（静岡県河津町）

撮影された作品：「孤独のグルメ」

ご当地グルメ／お土産：河津わさび丼、あんバターわさこ

○全国ふるさと甲子園「行きたくなったふるさと」大賞 3位

青森県東京事務所（青森県）

撮影された作品：「ライアの祈り」

ご当地グルメ／お土産：ライアの祈り（レーズンチョコレートケーキとカフェミルクチョコレートケーキ）

○全国ふるさと甲子園「行きたくなったふるさと」大賞 4位

蒲郡商工会議所（愛知県蒲郡市）

撮影された作品：「華麗なる一族」

ご当地グルメ／お土産：ガマゴリうどん

○全国ふるさと甲子園「行きたくなかったふるさと」大賞 5位

綾瀬市環境経済部商工振興課（神奈川県綾瀬市）

撮影された作品：「エイトレンジャー2」

ご当地グルメ／お土産：あやせぶたメンチ

○全国ふるさと甲子園「世界に誇る逸品」賞

十日町市ロケ応援団（新潟県十日町市）

撮影された作品：「図書館戦争」

ご当地グルメ／お土産：越後サラダうどん、妻有ポークカレー他

○全国ふるさと甲子園「世界に誇るロケ地」賞

茨城県商工労働部観光物産課（茨城県）

撮影された作品：「昼顔」

ご当地グルメ／お土産：龍ヶ崎コロッケ、龍ヶ崎クリームコロッケ

＼ふるさと コンテスト の開催！／

決定！ “全国ふるさと甲子園”

ふるさと対抗！全国「行きたいまち」決定戦
～第1弾 『ロケ地&ご当地グルメ』編～



2015年8月7日(金)◆都市センターホテル
第一部:11時～14時／第二部:16時～19時

※表彰・閉会式は19時半～を予定

- 主催 : 「全国ロケ地 & ご当地グルメ」推進協議会
 後援 : 観光庁、総務省、復興庁、国土交通省、経済産業省、農林水産省、文化庁
 松竹(株)、(株)TMオフィス、ロケーションジャパン編集部
 協力 : ロケツーリズム連絡会、跡見学園女子大学、(株)ローソン、LJマルシェ
 企画 : NPOふるさと活性隊、(株)地域活性プランニング
 運営事務局: 都市センターホテル
 実行委員長 : 藤崎慎一 (株)地域活性プランニング)

《決起人兼審査委員長》

内閣総理大臣補佐官 木村太郎 (ふるさとづくり推進担当)

美しいふるさとの誇りを守る“ふるさとのこし”
人々の心にある“ふるさと”を未来につないでいくために

効果的PR

住民の誇り

経済効果

- 観光集客のUP
- 自然・景観の保全
- 風景・文化自慢
- 地元グルメ・特産自慢
- 地域経済の発展
- 地域雇用の増加



美しいふるさとの誇りを守る効果的な“ふるさとのこし” ～ロケツーリズムとご当地グルメ～

映画の舞台を訪ねる・・・ **ロケツーリズム**

<韓国×インバウンド>

「冬のソナタ」で訪韓客 **2倍!**

ふるさとの**景色**が特別に



ふるさとの自慢・・・

ご当地グルメ

<河津わさび丼>

提供店舗が、**2店舗**から**13店舗**に急増!
(経済効果は1年で**2,938万円!**)

ふるさとの**グルメ**が再発見



美しいふるさとの誇りを守る“ふるさとのこし” 人々の心にある“ふるさと”を 未来につないでいくために

“ふるさとの魅力”

- ・残したい景色は? → 伝える**場**が必要!
- ・とっておきの食は?



行って・食べて・買って おなかいっぱい!

決定!“全国ふるさと甲子園”

世界に誇る!

ふるさと対抗! 全国「行きたいまち」決定戦 ～第1弾『ロケ地&ご当地グルメ』編～

人気ドラマや映画のロケ地となった地域が大集合!
わがまち自慢として、観光PRや話題のご当地グルメ・特産品の販売を通して競い合い、
当日、皆様の投票で「行きたくなったふるさとNo.1」を決定します!
行って・食べて・買って、おなかいっぱいふるさとを応援しませんか。

岩手県久慈市



三重県津市



新潟県十日町市



大分県豊後高田市

全国から
55団体が出場!

『あまちゃん』
『男たちの大和/YAMATO』
『ごめんね青春!』
の舞台が東京に!

*出店一覧は裏面へ

東京では買えない
お土産が勢ぞろい!

2015年 8月7日(金)

昼の部 11:00~14:00(受付10:30~)

夜の部 16:00~19:00(受付15:30~)

尚、19:30~20:00(予定)表彰・閉会式には一般来場者もご参加いただけます。

場 所 都市センターホテル L階・3階・5階

入場券: おひとり様(中学生以上)※小学生以下は入場無料

¥3,000(税込)

当日会場で使えるグルメチケット12枚綴り&投票券付き

あの「まめぶ汁」、「みしまコロッケ」も!?
その他約100ものご当地グルメが大集合!!



伊豆・河津町・わさび丼



岩手県久慈市・まめぶ汁



静岡県三島市・みしまコロッケ

Loppi

全国ふるさと甲子園入場引換券の
お求めはローソン・ミニストップに
設置のLoppiで!



Loppi端末に、
Loppi専用QRコードを
かざすと検索画面が
ショートカットでき、
申込画面に飛びます。



WEB購入は
LJマルシェHPへ
<http://ljmarche.jp/>

地域のおきをおきを100%
LJマルシェ
LJMARCHE



「ほかにもこんなに!お祭り気分!」詳細は公式HPをご覧ください。

無料で楽しめる『男はつらいよ』パネル展、ご当地キャラ記念撮影会、ロケ地情報誌
「ロケーションジャパン」がおすすめするロケ地マップコーナーのほか、全国の日本酒・
お土産(グルメ)のお買いものも充実♡



寛さんにはまた会える!パネル展
「男はつらいよ」シリーズ ©松竹株式会社



全国の酒造が集合!
利き酒も楽しめる!



全国の特産品が勢ぞろい!購入者にはさらに
プレゼント(抽選)も!※画像はイメージです



話題の映画・ドラマの
ロケ地マップも!

【主催】「全国ロケ地&ご当地グルメ」推進事業実行委員会
【後援】観光庁・総務省・復興庁・国土交通省・経済産業省・松竹株式会社・株式会社TMオフィス・ロケーションジャパン編集部
【協力】ロケツーリズム連絡会・跡見学園女子大学・株式会社ローソン・LJマルシェ
【企画】NPOふるさと活性隊・株式会社地域活性プランニング
実行委員長 / 藤崎 慎一(株式会社地域活性プランニング)
PRプロデューサー / 殿村 美樹(株式会社TMオフィス)

公式サイト <http://furusato-koshien.jp>

【運営事務局】都市センターホテル
〒102-0093 東京都千代田区平河町2丁目4番1号
(ご予約・お問い合わせ) 03-5216-8819 [直通]
(受付時間10:00~17:00)

・東京メトロ 永田町駅9B出口より徒歩3分
・東京メトロ 麴町駅1番出口より徒歩4分
・東京メトロ 赤坂見附駅より徒歩8分



本イベントのPRチラシ(表面)



ふるさと対抗!あなたが行きたくなったらまちはどこ?



(出場予定団体一覧) ※は会場で食べられるご当地グルメです。

| 県名 | 市町村 | 撮影された作品 | ご当地グルメ・お土産 | 団体名 |
|------|---------------|------------------|---|------------------------------------|
| 青森県 | 青森県 | ライアの祈り | ライアの祈り (レーズンチョコレートケーキとカフェミルクチョコレートケーキ) | 青森県東京事務所 |
| 岩手県 | 久慈市 | あまちゃん | ※久慈めめぶ汁/久慈めめぶ汁レトルトパック | 北三陸あまちゃん観光推進協議会 |
| 宮城県 | 仙台市・石巻市 | ポテチ/アゲイン | ※石巻穴子丼/※金華そば寿司 | 仙台市東京事務所/(株)ヤマトミ |
| 秋田県 | 北秋田市 | IRIS(韓国ドラマ) | ※きりたんぼ鍋/バターもち | 北秋田市産業部商工観光課 |
| 福島県 | 会津若松市 | 八重の桜 | ※こづゆ/カレー焼きそば | 福島県会津若松市観光商工部観光課 |
| 茨城県 | 茨城県 | 昼顔 | ※龍ヶ崎コロッケ/龍ヶ崎クリームコロッケ | 茨城県商工労働部観光物産課 |
| 茨城県 | 牛久市 | 出沒!アド街ック天国 | 薫るかりんとう2種 | (株)コルカリノ |
| 栃木県 | 益子町 | 益子日和 | ※ヒルマ汁 | 益子町産業建設部観光商工課 |
| 千葉県 | いすみ市 | 菜の花ラインに乗りかえて | 長期熟成純米古酒 古今 他2種/手作りチーズ3種 | いすみ市農林水産課 |
| 千葉県 | 成田市 | あぼやん | 成田ソラあんばん | 成田市 経済部観光プロモーション課 |
| 東京都 | 葛飾区 | 男はつらいよ | 華団子/柴又もり | 葛飾区 地域振興部観光課 |
| 神奈川県 | 藤沢市 | 陽だまりの彼女 | 丸焼きたこせんべい | 藤沢市経済部観光課/湘南藤沢フィルムコミッション |
| 神奈川県 | 綾瀬市 | エイトレンジャー2 | ※あやせぶたメンチ | 綾瀬市 環境経済部商工振興課 |
| 新潟県 | 長岡市 | この空の花 | 布乃利そば/元祖柿の種他 | 長岡ロケなび |
| 新潟県 | 十日町市 | 図書館戦争 | ※越後サラダうどん/妻有ボークカレー 他 | 十日町市ロケ応援団 |
| 石川県 | 七尾市 | まれ | 能登のまいもんカステラ3種 | 農業生産法人 働スギヨファーム |
| 福井県 | 小浜市 | ちりとてちん | ※若狭おはま鯖おでん/焼き鯖寿司/サバ缶/浜焼き鯖 | 小浜市 産業部 商工観光課 |
| 長野県 | 千曲市 | 風林火山 | ※あんず製品 | 千曲市 企画政策部 総合政策課 |
| 静岡県 | 三島市 | ごめんね青春! | ※みしまフルーティーキャラット/まんぶく手どらやき みしまコロッケ/みしまコロッケはん | 三島市 産業振興部商工観光課 |
| 静岡県 | 沼津市 | わが母の記 | ※カリアゲひもの/だれっす | 沼津市 産業振興部商工振興課 |
| 静岡県 | 浜松市 | 新宿スワン | はままつラスク | 浜松市 産業部観光交流課 |
| 静岡県 | 浜松市 | とんねるらんでぶー | ※三ヶ日ローストビーフ/生搾りみかんジュース | (株)三愛 |
| 静岡県 | 河津町 | 孤独のグルメ | ※河津わさび丼/あんバターわさこ | 河津町商工会 河津わさびで泣かせ隊 |
| 愛知県 | 蒲郡市 | 華麗なる一族 | ※ガマコリうどん | 蒲郡商工会議所 |
| 三重県 | 南伊勢町 | きいろいゾウ | ※骨なし串ひもの/ソマカツオの塩切り | 南伊勢町観光商工課 |
| 三重県 | 多気町 | 高校生レストラン | ※松阪牛しぐれ茶漬け/※伊勢羊入りアイスクリーム/ 高校生レストラン監修だし巻き | 多気町環境商工課 |
| 三重県 | 津市 | WOOD JOB!(ウッジョブ) | ※津ぎようざ | 津市政策財務部東京事務所 |
| 三重県 | 菟野町 | 男はつらいよ | ※僧兵鍋/僧兵味噌 | 菟野町 観光産業課 観光商工推進室 |
| 滋賀県 | 滋賀県 | 駆込み女と駆出し男 | ※甲賀流 忍者餃子 | 滋賀ロケーションオフィス |
| 京都府 | 京丹後市 | 新・座頭市 | ※丹後ばらずし/丹後ばらずしセット | 京丹後市 商工観光部観光振興課(京丹後フィルムコミッション) |
| 大阪府 | 羽曳野市・藤井寺市・太子町 | あしたになれば。 | ※ワイン・日本酒/さいばし(馬肉燻製)などのセット/ ご当地ソース(みかん・いちじく)/かすうどん など | 羽曳野市・藤井寺市・太子町シネマプロジェクト推進会議 |
| 大阪府 | 堺市 | 寄生獣 | 日本酒 千利休 | 堺泉造(有) |
| 兵庫県 | 神河町 | ノルウェイの森 | ※自然薯だしとろろ丼/柚子特産品各種 | 神河町 地域振興課 商工観光係 |
| 兵庫県 | 淡路島 | 種まく旅人 くにうみの郷 | ※玉ねぎソテー/※玉ねぎスープ/玉ねぎ/味噌付け海苔 他 | 兵庫県淡路島民局/一般社団法人淡路島観光協会/淡路島フィルムオフィス |
| 奈良県 | 五條市 | 萌の朱雀 | たなかの柿の葉すし | 五條市 産業環境部 企業観光戦略課 |
| 和歌山県 | 新宮市 | 怪獣 | 徐福茶/勝浦マグロ こだわり西京漬け/金山寺漬け | 新宮市商工観光課 |
| 和歌山県 | 和歌山市 | 八代将軍 吉宗 | ※和歌山ジャンジャール/和歌山ラーメン | 和歌山市観光協会 |
| 岡山県 | 玉野市 | 流星ワゴン | ※たまの温玉めし/紫いもクッキー/スイートポテト | 玉野市産業振興部 商工観光課 |
| 広島県 | 呉市 | 男たちの大和/YAMATO | ※呉海軍カレー | 呉市東京事務所 |
| 山口県 | 長門市 | はぐれ刑事純情派 | ※焼き鳥 | 長門市 経済観光部観光課 観光振興係 |
| 徳島県 | 徳島県 | ウェルかめ | ※南阿波丼 | 南部総合県民局 |
| 愛媛県 | 伊予市 | 男はつらいよ | 唐川びわ葉茶/じゃこ天/栗菓子 | 伊予市産業建設部 経済雇用戦略課 |
| 愛媛県 | 松山市 | 坂の上の雲 | 道後温泉体験セット/まつやま農林水産物ブランドお試しセット | 松山市総合政策部東京事務所 |
| 福岡県 | 筑上町 | 軍師官兵衛 | 隊員食堂カレー | 筑上町 商工課 商工観光係 |
| 福岡県 | 柳川市 | 柳川物語 | ※うむすび/福岡のり(柳川産) | 柳川市 産業経済部 観光課 柳川フィルムコミッション |
| 佐賀県 | 小城市 | ソフトボーイ | 小城羊羹 | 小城市産業部商工観光課 |
| 長崎県 | 佐世保市 | 69 sixty nine | 護衛艦さわぎりカレー/イージス艦こんごうカレー/ 駄菓子詰め合わせ | 佐世保市観光物産振興局/佐世保市東京事務所 |
| 長崎県 | 南松浦郡新上五島町 | くちびるに歌を | ※五島手延べうどん/あごだしつゆ | (株)長崎五島うどん |
| 熊本県 | 菊池市 | いっぶん | ※菊池の福井どんでん返し/松風 | 菊池市経済部農政課ブランド推進室 |
| 熊本県 | 熊本県市長会 | 黄泉がえり | ※阿蘇のあか牛/※くま焼酎水割り | 熊本県市長会東京事務所 |
| 熊本県 | 熊本市 | アリエル王子と監視人 | ※馬ホルモンの煮込み/※清酒・赤酒 | 熊本市東京事務所 |
| 大分県 | 宇佐市 | カラアゲ☆USA | ※宇佐からあげ/西の星(試飲) | 宇佐市経済部 観光まちづくり課 |
| 大分県 | 大分県・大分市 | 軍師官兵衛/恋空 | たんご汁/やせうま/乾しいたげ/温泉水 | 東京事務所おんせん県おいた課/(株)桃太郎海苔 |
| 大分県 | 豊後高田市 | そんじょごら商店街 | ※豊後・米仕上牛椎茸メンチカツ/ | 豊後高田市企画情報課 |
| 鹿児島県 | 鹿児島市 | 篤姫 | ※薩摩黒からあげ | 鹿児島市東京事務所 |

私たちも応援しています!!

決起人 兼 審査委員長 内閣総理大臣補佐官 木村 太郎(ふるさとづくり推進担当)

松竹(株)代表取締役社長 迫本 淳一 / (株)ホリプロ 代表取締役社長CEO 堀 義貴 / 映画「るろうに剣心」監督 大友 啓史
(株)三越伊勢丹ホールディングス 代表取締役社長執行役員 大西 洋 / (株)東急百貨店 代表取締役社長執行役員 二橋 千裕
(株)阪急阪神百貨店 代表取締役社長 荒木 直也 / (株)ローソン 代表取締役社長 玉塚 元一 / タレント 竹原 慎二

※イベント情報は一部変更になる場合があります。詳細は公式サイトでご確認ください。⇒

公式サイト <http://furusato-koshien.jp>

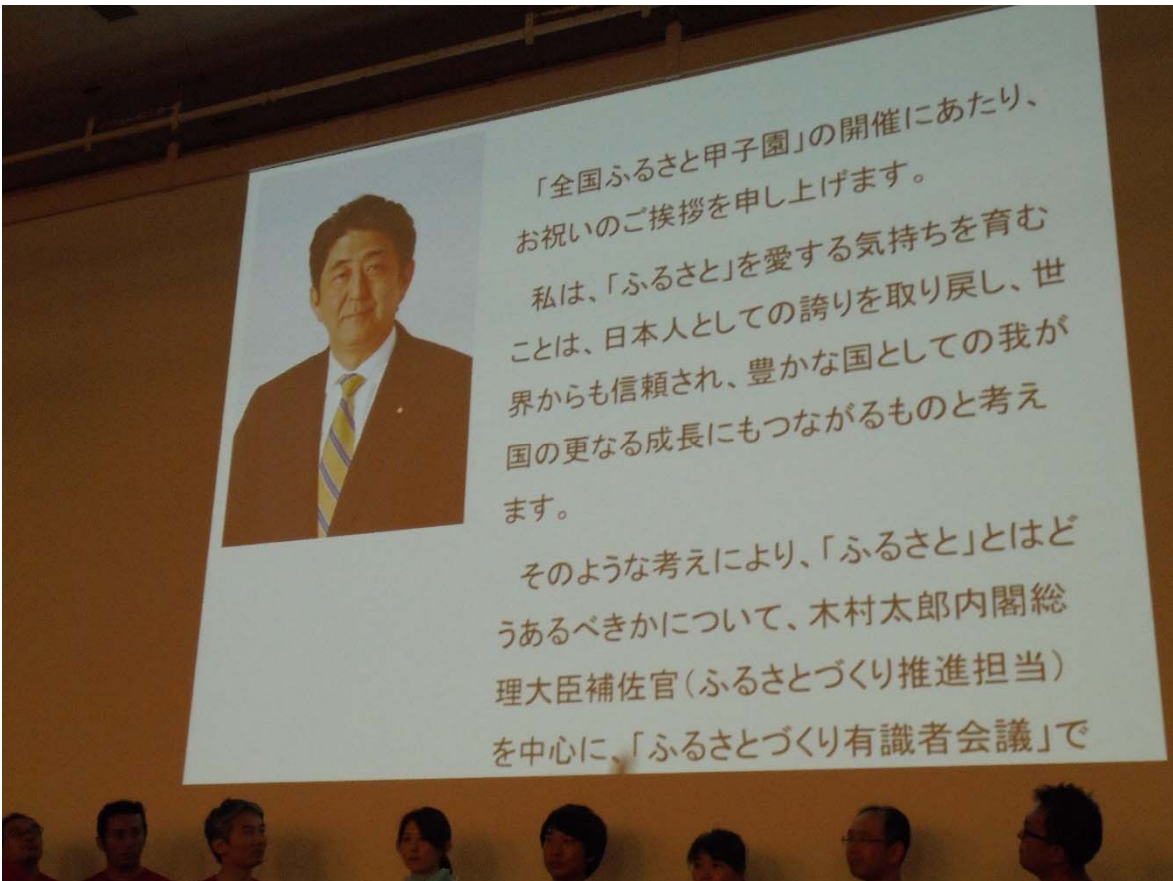
運営事務局:都市センターホテル 〒102-0093 東京都千代田区平河町2丁目4番1号 ☎03-5216-8819 FAX(03)3263-3010



本イベントのPRチラシ(裏面)



開会式における木村内閣総理大臣補佐官ご挨拶



安倍内閣総理大臣からのメッセージ



来場者で賑わうブースの様子





来場者で賑わうブースの様子



ゆるキャラの紹介



ステージにおける団体のPR





グランプリ受賞団体への表彰状の授与



受賞団体等との記念撮影

參考資料編

参考資料 一覧

- 参考資料1 ふるさとづくり有識者会議の開催について
(平成25年4月10日内閣総理大臣決裁) 103
- 参考資料2 ふるさとづくり有識者会議 委員名簿 104
- 参考資料3 「ふるさとづくり」有識者会議報告
(平成26年3月27日) 105
- 参考資料4 まち・ひと・しごと創生総合戦略
(平成26年12月27日閣議決定)(抄) 117

ふるさとづくり有識者会議の開催について

（平成25年4月10日
内閣総理大臣決裁）

1. 趣旨

文化、伝統、自然、歴史を大切にすることにより、日本人の心のよりどころであるふるさとを愛する気持ちを育み、誇りあるふるさとをつくるための基本理念や施策の在り方について検討を行うため、ふるさとづくり有識者会議（以下「会議」という。）を開催する。

2. 構成

- （1）会議は、内閣総理大臣の下に開催する。
- （2）会議の構成は、別紙のとおりとする。
- （3）会議は、必要に応じ、関係者の出席を求め、意見を聴取することができる。

3. 庶務

会議の庶務は、関係行政機関の協力を得て、内閣官房において処理する。

ふるさとづくり有識者会議 委員名簿



大南信也
(NPO法人グリーンバレー理事長)



中貝宗治
(兵庫県豊岡市長)



小田切徳美
(明治大学農学部教授) ※座長



濱田純
(秋田大学地域創生センター准教授
(兼)北秋田分校長)



鎌田東二
(京都大学こころの未来研究センター
教授)



原範子
(全国生活研究グループ連絡協議会
会長)



岸川政之
(株百五銀行営業渉外部顧問、皇學館
大学現代日本社会学部特命教授)



原田弘子
(マネジメントオフィス HARADA 代
表)



木下齊
(一般社団法人エリア・イノベーション
・アライアンス代表理事)



藤崎慎一
(株式会社地域活性プランニング代
表取締役)



後藤孝典
(弁護士)



マリ・クリスティーヌ
(異文化コミュニケーター、東京農
業大学客員教授)



殿村美樹
(株式会社TMオフィス代表取締役)

(50音順、敬称略)

1 今なぜ「ふるさとづくり」か

従来から美しい自然と文化の中で、私たちはその営みを続けており、日々の暮らしの中で、自分が生まれ育った場所を「ふるさと」と認識し、愛してきました。「ふるさと」に帰属しているという意識が、私たちに安心感をもたらしてきたのです。「ふるさと」は、いわば心の拠りどころでした。

そして、その「ふるさと」の原風景には、青き山、清き川、風や空、祭りなど、世代を超えての一定の原型があるように思われますが、しかし、実際には途絶えてはならない原風景が失われつつあるなど、現実と「ふるさと」の原型に隔たりが生じてきています。

また、大都市に人口が集中している現状においては、自分が生まれ育った場所が「ふるさと」であるという認識を持たない人も増えています。

このような状況を踏まえると、私たちの活力の源であり、誇りである「ふるさと」の価値を再認識し、「ふるさと」を愛することの大切さを後世に伝えていくことが必要ではないでしょうか。そして、そのために「ふるさとづくり」をどのように進めていくかを、今、考えてみるべきではないでしょうか。

「ふるさとづくり有識者会議」は、そのような問題意識のもと、「ふるさと」について改めて思いをいたし、「ふるさとづくり」の意義や手法などについて多方面から議論したものです。

「ふるさとづくり有識者会議」は、平成25年4月11日に第1回会議を開催して以来、有識者会議を計4回開催し、また、現地調査も3回行いました。そして、会議での議論や各地域の方々との意見交換を踏まえて、『「ふるさとづくり」推進中間報告』をとりまとめ、7月3日に安倍総理に提出しました。

その後、今後の各地域でのふるさとづくりの活動の参考となるよう、「中間報告」の内容をわかりやすくまとめた『ふるさとづくりガイドブック』及びふるさとづくり有識者会議委員の活動実績や関係省庁のふるさとづくり関連施策をまとめた『ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集』を作成し、全国の都道府県、市町村、及びふるさとづくり推進組織（合計約6000団体）に配布したところです。

また、ふるさとづくり有識者会議による「ふるさとづくり実践活動」を4カ所で計7回行い、各地でふるさとづくりに取り組む方々と意見交換し、現状や課題を伺い、活動へのアドバイスをを行いました。

これらの活動も踏まえて、さらに有識者会議を3回開催し、本報告を取りまとめたところです。

2 「ふるさとづくり」の意義

「ふるさと」は心の中にあるものであり、自分自身が最終的に帰属する精神的な拠りどころになる場所です。生まれ育った場所を「ふるさと」と思う人が多いが、「ふるさと」は必ずしも生まれ育った場所に限定されるものではありません。

例えば、両親や祖父母の出身地、学生時代を過ごした場所、勤務で赴任した場所、旅行で訪れた場所等、何かのきっかけで愛着を感じ、何らかの形でかわった様々な場所が「ふるさと」になり得ます。また、生まれ育ったことはもちろん様々なかわりがあれば、地方に限らず、東京や大阪などの都市部も、その人にとっての「ふるさと」です。

一人一人にとっての「ふるさと」は、落ち着き、穏やかさ、安らぎの基であるとともに、明日に向かって生きていこうという原動力となりうるものとしても人生の基礎となるものであり、「ふるさと」に対する誇りは、自分自身に対する誇りともつながるものです。

「ふるさとづくり」とは、ある場所に「こころをよせる」とこと、「そこにかかわる」とことのくり返しであり、ひとりひとりのこれまでの「ふるさと」に対する愛着、帰属意識が一層高まるとともに、新しい場所を「ふるさと」と思うことにもつながり、これによって「ふるさと」がつくられていきます。

こころの拠りどころとしての「ふるさと」は、自分自身の支えとなる場所であり、かつ、安心と癒やしを感じる場所です。

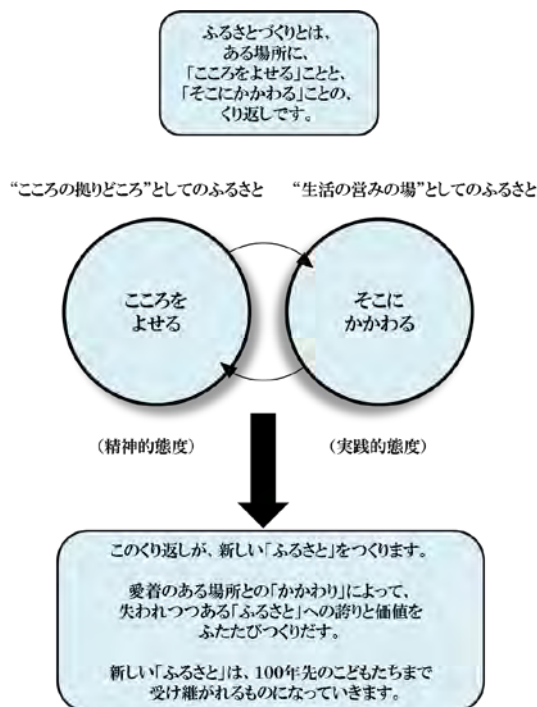
また、生活の営みの場としての「ふるさと」は、日本人の原像風景としての自然環境が残された場所、誇りある生活の場として自律的な経済活動が営まれ

る場所、人々の絆やつながり、交流が築かれている場所です。

「こころの拠りどころ」としてのふるさとに、こころをよせる（精神的態度）ことにより、「ふるさと」に対する愛着が生まれます。そして、こころをよせるだけでなく、「生活の営みの場」としての「ふるさと」に、何らかの形でかかわる（実践的態度）ことにより、さらに「ふるさと」を思う気持ちが強くなっていきます。

ある場所に「かかわる」ことにより、また、その場所へ「こころをよせる」ことが促進されていき、また、より深く「かかわる」ようになっていく。このくり返しによって、新しい「ふるさと」がつくられていきます。愛着のある場所との「かかわり」によって、失われつつある「ふるさと」への誇りと価値をふたたびつくりだすことによって、新しい「ふるさと」は、100年先の子どもたちまで受け継がれるものになっていきます。

特に、2020年には、「2020年オリンピック・パラリンピック東京大会」が開催され、世界中の人々が日本に注目し、日本を訪れます。その際、私達一人一人が個性あふれた多様な「ふるさと」を再度認識するとともに、東京にとどまらず日本各地の「ふるさと」の良さを世界の人々に実感していただく絶好の機会としていくことが大切です。



ふるさとづくり有識者会議では、このような「ふるさとづくり」の意義を国民の皆様にはわかりやすく示すため、次のように「～ふるさとづくりとは・・・(Concept Statement)～」としてまとめました。

～「ふるさとづくり」とは・・・(Concept Statement)～

こころをよせる。そこにかかわる。

「ふるさと」は、
生まれ育った場所だけではありません。

「ふるさと」は、
私たち日本人一人ひとりが、
自分のよりどころとなる
「こころをよせる」やすらぎの場を指します。

愛する人が住むところかもしれない。
偶然訪れた村や町かもしれません。
「日本全体が、私のふるさと」
という人もいるでしょう。

大切なのは、「こころをよせる」
ばかりではなく、何かのかたちで、
「そこにかかわる」こと。

小さなことでもかまいません。
そこに旅にでかけてみる。
その土地の産品を買ってみる。
そこに住む人といっしょに
汗を流して働いてみる。

少しの「かかわり」で、
「こころをよせる」気持ちが強くなる。
それがきっかけとなって、
さらに深く「かかわる」ようになる。

このくり返しが新しい「ふるさと」をつくります。

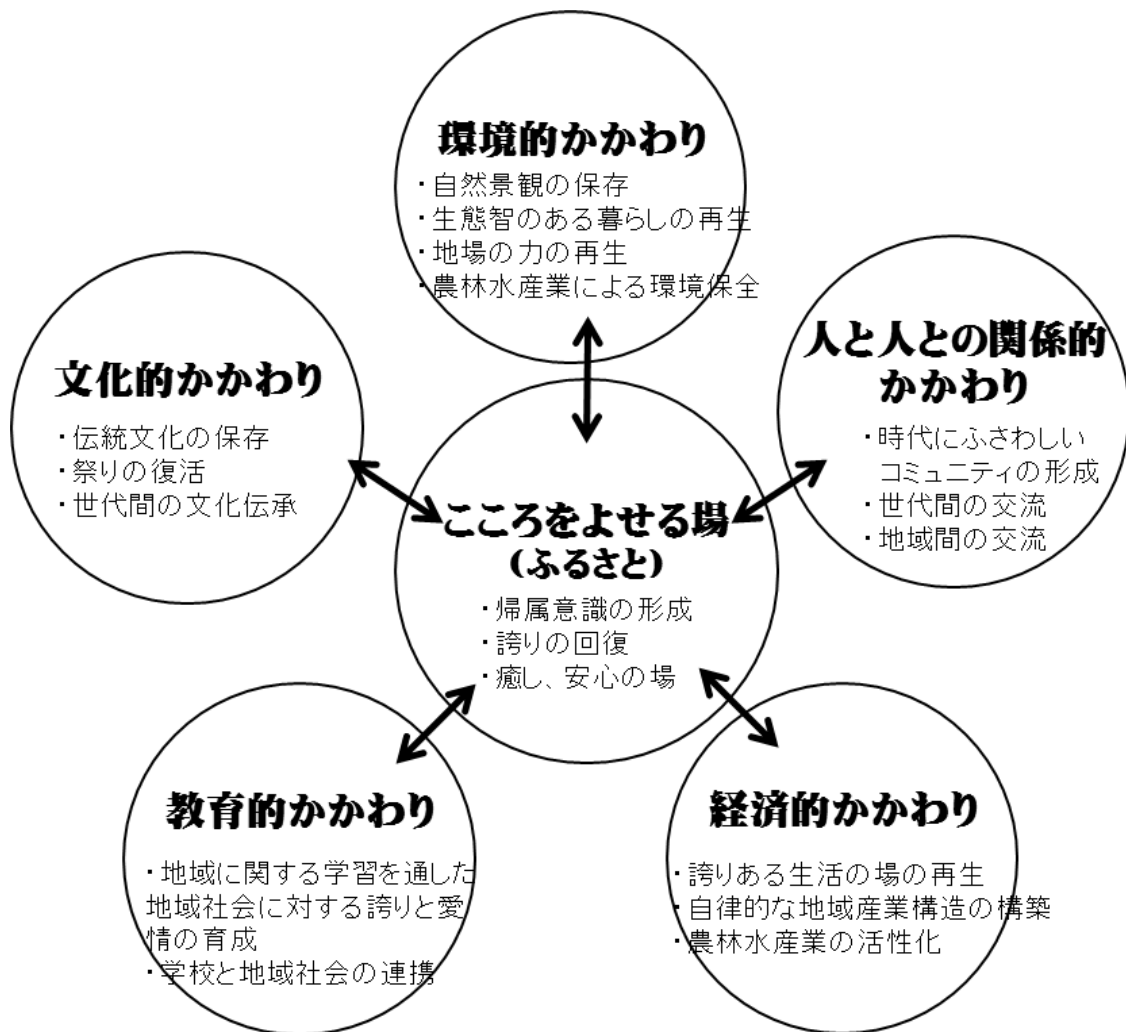
愛着のある場所との「かかわり」によって、
失われつつある「ふるさと」への誇りと価値を
ふたたびつくりだす。

新しい「ふるさと」は、100年先の子どもたちまで
受け継がれるものになっていきます。

3 「ふるさとづくり」の要素とその取組

こころをよせる場である「ふるさと」とのかかわり方は様々であり、いくつかのインターフェイスが存在し、人によって、様々な要素や深さ、単位で「かかわり」をもつことにより、「かかわりのネットワーク」が構築されます。

ふるさとづくり有識者会議では、「ふるさと」とのかかわりを、「環境的かかわり」、「人と人との関係的かかわり」、「経済的かかわり」、「教育的かかわり」、「文化的かかわり」の5つの視点から整理したところであり、それぞれのかかわりについては、既に各地で、様々な取組が始まっています。



(1) 環境的かかわり

美しい自然の景観を後世に残していくことが、「ふるさと」を守ることとなります。私たち日本人の原風景としての美しい景観を後世に残していくことが必要であり、それも箱庭のように静的に保存するだけでなく、そこに自然と人間の営みのバランスがとれた「生態智」をきちんと保っていくことが大切であり、ふるさとづくりは、自然と生活をもっと調和させていくことです。

具体的な環境的かかわりとしては、自然景観の保存、生態智ある暮らしの再生、地場の力の再生、農林水産業による環境保全等のかかわり方があります。

<環境的かかわりの先進事例>

- ・景観・歴史を大切にしまちづくり（東京都目黒区、石川県金沢市等）
 - ・「日本で最も美しい村」連合（北海道美瑛町、徳島県上勝町等）
- 引き続き、国土交通省等において良好な景観の形成や歴史的な街並みの保全・活用を推進

(2) 人と人との関係的かかわり

地域や世代の違いを超えて、人々の交流を広げることにより、そこから新しい「ふるさと」が生まれます。昔ながらの地縁・血縁に止まらず、新たな縁や絆が生まれるよう、都市と農村の地域を越えて、また世代や年齢を越えて、今まで交流のなかった人々とも交わりを広げていくと、そこからこれからの「ふるさと」にふさわしい、新しいコミュニティが次々育っていきます。

具体的な人と人との関係的かかわりとしては、時代にふさわしいコミュニティの形成、世代間の交流、地域間の交流等のかかわり方があります。

<人と人との関係的かかわりの先進事例>

- ・新潟県上越市、十日町市「田舎体験推進協議会」
- 引き続き、農林水産省等において、都市と農山漁村の共生・対流を推進
- ・山形県村山市、長崎県対馬市「地域おこし協力隊」
- 引き続き、総務省等において、地域おこし協力隊の取り組みを支援

(3) 経済的かかわり

大胆なアイデアと熱い情熱で、地域の産業に力を与えていくことが、「ふるさと」への気持ちを強くしていくことにつながります。多彩な才能と熱い情熱が結集し、新たな地域産業を担う人々や組織を育てていくことにより、そこに暮らす人々の生活を潤し、地域の活力がさらに高まるような仕事がどんどんつくられ、経済の力によって、「ふるさと」への気持ちをもっと強くしていくことができます。

具体的な経済的かかわりとしては、誇りある生活の場の再生、自律的な地域

産業構造の構築、農林水産業の活性化等のかかわり方があります。

＜経済的かかわりの先進事例＞

- ・熊本県荒尾市「企業組合中央青青空企画」
- 今後、経済産業省等において、専門家派遣や各種支援制度も活用し、こうした取り組みの全国展開を目指す
- ・青森県青森市「ナマコ加工廃棄物を活用した地場産業づくり」
(地域経済イノベーションサイクル)
- 今後、総務省等において地域経済イノベーションサイクルの全国展開に取り組む
- ・岩手県紫波郡紫波町「オガールプラザ」(官民合築による民間と行政との複合施設)
- 引き続き、国土交通省等を含む「官」と「民」との連携によるまちづくりを推進

(4) 教育的かかわり

ふるさとの歴史、文化、産業等を学ぶことによって、その場所への誇りと愛情が育っていくのであり、ふるさとの資産や歴史をもう一度学び直すことが必要です。古い場所でも新しい場所でも、人々がその場所でどのようにかかわり、暮らし、愛してきたかを知ることで、新たな魅力が発見できるはずであり、その場所の人々の努力や愛情が、今も受け継がれていることを知ることで、ふるさとに対する誇りと愛情は、もっと強くなります。

具体的な教育的かかわりとしては、地域に関する学習を通じた地域社会に対する誇りと愛情の育成、学校と地域社会の連携等のかかわり方があります。

＜教育的かかわりの先進事例＞

- ・千葉県佐倉市「佐倉学」
- ・宮崎県西都市「さいと学」
- 今後、文部科学省等において、こうした取り組みの更なる普及を目指す

(5) 文化的かかわり

伝統文化という価値への理解を含めることにより、その場所ならではの知的活力が生まれてくる。長い歴史や伝統に育まれてきた「祭り」や「芸能」などその場所ならではの伝統文化を、子どもや孫の代へとしっかり受け継いでいくことが必要であり、また、歴史の浅い場所でも、そこに生まれた新しい文化を見つけ、その場所ならではの知的活力に育てていくことにより新たな「ふるさと」がつくられていく。

具体的な文化的かかわりとしては、伝統文化の保存、祭りの復活、世代間の

文化伝承等のかかわり方がある。

＜文化的かかわりの先進事例＞

- ・ 地域芸能伝統まつり
 - ・ 和歌山県新宮市「熊野学」
- 引き続き、総務省等において取り組みを支援

「ふるさと」に対する一つの行動が様々な「かかわり」の側面を持つ場合もあり、これらの「ふるさと」に対する「かかわり」によって、こころを寄せる場である「ふるさと」に対する帰属意識が形成され、誇りが回復し、癒やし、安心の場である「ふるさと」がつくられていきます。

4 ふるさとづくりの全国発信と実践活動

ふるさとづくりの取組を、全国で一層推進していくため、ふるさとづくりの意義をわかりやすく示した「ふるさとづくりとは… (Concept Statement)」を広く周知するとともに、「ふるさとづくり」に役立つ各省庁の支援施策をわかりやすく示すことも必要です。

このため、ふるさとづくり有識者会議では、7月の中間報告後、今後の各地域でのふるさとづくりの活動の参考となるよう、「中間報告」の内容をわかりやすくまとめた『ふるさとづくりガイドブック』及びふるさとづくり有識者会議委員の活動実績や関係省庁のふるさとづくり関連施策をまとめた『ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集』を作成し、全国の都道府県、市町村、及びふるさとづくり推進組織（合計約6000団体）に配布したところです。

また、ふるさとづくり有識者会議では、各地域でふるさとづくりに取り組む地方自治体やふるさとづくり推進組織との意見交換を行うなど、ふるさとづくりの実践活動を行いました。

各地で、様々なふるさとづくりの取組が見られるところですが、それぞれに課題も抱えており、

- ・ 行政が縦割りではなく横断的に取り組むことが必要であり、また、民間と行政の連携強化や役割分担の明確化が必要。
- ・ ふるさとづくりの活動に取り組む方々は現状では、高齢者、男性が多い、など

偏りが見られるところであり、これを多様な主体に広げていくことが必要。

- ・「ふるさと学」の推進に際しては、市民の学習ニーズは高度化・多様化が進んでおり、これに即した実践方法や開催時期、メニューの見直しが必要。
- ・「ふるさと学」を学習するとともに、実際の体験を通して学べる場が必要。
- ・各地のふるさとづくりの推進組織が知恵を絞り、多様な関係者を巻き込んでいく姿勢こそが、ふるさとを愛する大切さを気づかせてくれるのではないか。

等、ふるさとづくり有識者会議において、今後取り組んでいくことが重要とした点と同様の意見があり、これに対して有識者会議の委員からアドバイスも行いました。今後とも、継続的にこうした取組が必要です。

5 「ふるさとづくり」推進の充実と当面の取組

(1) ふるさとづくり推進の充実のために

今後の「ふるさとづくり」推進をより一層実のあるものにしていくために、本有識者会議としては、以下の点について取り組んでいくことが重要であると考えます。その際には、全国それぞれの地域の個性を活かした取り組みが活性化していくよう、「多様性」を担保することが必要です。

① 「ふるさと学」の推進により、「ふるさと」に対する誇りを回復すること

それぞれの「ふるさと」には、固有の自然や歴史や文化があり、例えば、藩校教育に見られるように、その場所ならではの学びの体系があり、街道毎での文化圏の形成も見られました。

いまいちど「ふるさと」の現状や地域の魅力、歴史などを体系的に整理し、深く掘り下げ、再発見し、それを幼児教育、小・中・高等学校や公民館・図書館・美術館あるいはインターネットなど様々な機会学ぶことにより、「ふるさと」に対する理解を深め、新たな魅力や普遍的な価値に気づき、誇りを取り戻し、「ここをよせる」きっかけにすることが必要です。例えば、農林水産業をはじめそれぞれの地域の産業を題材として地域経済を学ぶことも考えられます。

こうした取組を「ふるさと学」と呼び、各地域にふさわしい「ふるさと学」を展開していくことが必要です。

② ふるさとづくりコーディネーターの育成により、「ふるさとづくり」の担い手を育てること

「ふるさと」に対して、様々なかたちでの「かかわり」を推進していく核となる人材、「ふるさと」に対する深い愛情と誇りを持ち、「ふるさと」の価値を

守り・創り・次の世代へつなげていくための熱意と知識と行動力で、「ふるさとづくり」を具体的な成果へとつなげる人材、すなわちふるさとづくりのコーディネーターを育成することが必要です。

③ 全国のふるさとづくり推進組織との協働により、地域の主体的な取組を後押しすること

すでに各自治体（47都道府県、1742市区町村）には、ふるさとづくりにかかわる数多くの団体が存在します（約3300団体、H25.6.26現在）。

各自治体やその諸団体に対して、先行事例や有識者の成功事例を情報共有し、さらにそれぞれの団体が推進したい方向性に対して、ふさわしい政策や制度的なメニューを提示することで、こうしたふるさとづくりの推進をサポートすることが必要です。

このような観点から、ふるさとづくりの啓発資料を作成し配布したところですが、引き続き、有識者や各省庁を交えて、都道府県や市町村と連携・協力しながら、全国各地の推進組織によるふるさとづくりを強力にサポートすべきです。

（２）平成26年度取組

本有識者会議としての提言は平成25年度末となったが、平成26年度においては、ふるさとづくりに関連する各省庁の既存の施策を着実に実施するとともに、新たな予算を必要としない取組みについても知恵を絞ることとして、以下のような、（１）に即したふるさとづくり推進活動や、ふるさとづくりの気運が一層高まるような取組みを実施すべきです。

① ふるさと学の展開

- ・ 各地域で既に取り組みされている「ふるさと学」に関して、副読本などコンテンツ関係、自治体やNPO等における推進体制などについて、全国各地の現状を調査するとともに、新たに「ふるさと学」への取組を検討している自治体やNPO等への情報提供を行うこと。

② ふるさとづくりコーディネーターの育成

- ・ ふるさとづくりコーディネーターに求められる資質や知識等について、先進事例を参考に体系的に集約しておくこと。また、その体系的な知識等について、どのような人材育成方法が適切であるか等についても、モデル的な取組を提示すること。

③ 全国のふるさとづくり推進組織との協働

- ・ 「ふるさとづくり推進中間報告」等の啓発資料の作成、配布やふるさとづくり推進活動等を通じて連携することができた全国のふるさとづくり推進組織とのネットワークを強化し、推進組織の運営形態（NPO、一般社団法人など）や活動の状況を把握するとともに、「ふるさとづくり」の様々な取り組みの情報発信の手法やサポート体制について、具体的に構築していくこと。
- ・ 「ふるさとづくり」に取り組む方々の励みになり、様々な活動がより一層活性化するよう、全国の「ふるさとづくり」の取り組みのなかから、他のモデルとなるような特に先進的な活動を行っている団体又は個人を表彰すること。

6 「ふるさとづくり」の更なる展開を目指して

ふるさとづくり有識者会議の議論は、安倍総理の「ふるさとづくり」に対する強い思いを受けて開始されました。

「ふるさとづくり」については、これまでも様々な取り組みが積み重ねられてきました。しかし、一方では、少子高齢化や人口減少が進行するなかで、全国で、多くの地域や「ふるさと」が、その存在そのものの危機に瀕しつつあるという厳しい状況にあることも事実です。

本有識者会議の議論においては、改めて、今なぜ「ふるさとづくり」を推進していくのか、「ふるさとづくり」の意義とは何かについて確認し、「ふるさとづくり」の要素とその取組について整理したうえで、中間報告をまとめました。

更に、その中間報告に盛り込んだ「ふるさとづくり」を、わかりやすいガイドブックとして全国発信するとともに、ふるさとづくりに前向きに取り組む地域の活動に参画し、その推進を支援する実践活動も積極的に行いました。

これらの結果、「ふるさとづくり」は、新しい一歩に向けて、ようやくその歩みを始めた状況といえます。今後、この活動を全国に浸透させ、安倍内閣が最大の課題とする地域の活性化として結実させるとともに、伝統ある「ふるさと」を守り、美しい日本を支えていくものとしていくことが重要です。また、このことが、全国それぞれの地域で生きていくことの「誇り」を再生していくこと

となるよう願うものです。

そのためには、本有識者会議で重点的に取り組むことと提言した、①ふるさと学の展開、②ふるさとづくりコーディネーターの育成、③全国のふるさとづくり推進組織との協働、の3点について、平成27年度以降においても、多様性を担保したより充実した施策として事業化し、実施すべきことはもちろんのこと、「ふるさとづくり」に関わる施策について、関係省庁がこれまで以上に連携して積極的に取り組んでいく必要があります。

このような取組を、「ふるさとづくり」についての明確な哲学と問題意識を持って、持続的に実施していくためには、組織的にも、制度的にも、より充実した仕組みが必要であることについても強く指摘します。

「ふるさと」を持つ意識が薄れるとともに、それぞれの地域で生きていくことの誇りが失われつつある今日、改めて、「ふるさとづくり」を強力に、かつ、粘り強く推進していくことが必要です。

こころをよせる場である「ふるさと」に様々な形で「かかわる」ことにより、一人一人の「ふるさと」に対する誇りや人々の絆が更に強くなっていきます。その地域にかかわる人々が、「ふるさとづくり」を通じて人生の価値と誇りを見出し元気になれば、地域全体にも活気が生まれます。

各地域がそれぞれの個性あふれた「ふるさとづくり」に取り組むことにより、日本全国津々浦々の地域に眠るありとあらゆる「多様な可能性」が再び開花し、各地域が活性化することが、新しい国づくりの一助となって日本全体にも活気が生まれ、世界の中で一層輝く国となることを強く確信しています。

本会議の中間報告をわかりやすくまとめた「ふるさとづくりガイドブック」及び「施策・取組事例集」は、全国の都道府県、市町村、ふるさとづくり推進組織に送付されたところです。

また、「ふるさとづくり」の活動に役立つ国の支援策や各地域での多様な取り組みを、全国のふるさとづくりに取り組む方々に、ポータルサイトやSNSを活用するなど、よりわかりやすく積極的に情報発信していくことが必要です。

本報告書が、都道府県知事、市町村長、ふるさとづくり推進組織のリーダーをはじめ、より多くの方々に御活用いただけることを大いに期待するとともに、国民一人一人の「ふるさとづくり」のきっかけとなり、各地域での取り組みが一層促進されることを念願しています。

「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成26年12月27日閣議決定）（抄）

（略）

2. 政策パッケージ

- (1) 地方にしごとをつくり、安心して働けるようにする
 - (2) 地方への新しいひとの流れをつくる
 - (3) 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる
 - (4) 時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する
- (ア)～(カ) (略)

(キ) ふるさとづくりの推進

【主な概要】

人口減少や超高齢化が進行する中で、全国で多くの「ふるさと」が、その存在そのものの危機に瀕しつつある。そこで、「ふるさと」の価値を再認識し、「ふるさと」を愛することの大切さを伝え、生まれた人は「ふるさと」にとどまり、都会に出た人は「ふるさと」に帰るきっかけとする。また、都会に生まれた人については、そこが新しい「ふるさと」となるよう、その場所に対する愛着、帰属意識を高める「ふるさとづくり」の取組を進めていく。こうした取組は、地域に住む住民が主体となった地方創生の推進に大きく寄与するものである。

こうした観点から、国が2020年までに達成すべき重要業績評価指標(KPI)は以下のとおりとする。

■ふるさとづくり推進組織の数を1万団体に増加(2013年度 3,291団体)

【主な施策】

◎ (4)-(キ)-① 「ふるさと」に対する誇りを高める施策の推進

ふるさとづくりの成功事例や地域における人材の育成方法、国の支援メニューなどを情報提供すること等により、ふるさとづくりを推進する組織やふるさとづくり活動の地域における核となる人材の育成を推進するとともに、それぞれの「ふるさと」の誇りの源泉となる固有の自然や歴史、文化等について、今一度、体系的に深く掘り下げ、再発見する活動を「ふるさと学」として整理し、地方公共団体やNPO等に情報提供しながら、小・中・高等学校における教育、公民館、図書館等における社会教育など様々な機会において学ぶ活動を推進する。



「ふるさとづくり有識者会議」については、
首相官邸ホームページをご覧ください。
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/hurusato/>)